
遊戯王アイドルマスターGX

キラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王アイドルマスターGX

【Nコード】

N7100X

【作者名】

キラー

【あらすじ】

未来からやってきたデュエリスト、パラドックスに勝利して3ヶ月……遊城十代はシンクロモンスターが流通し始めた世の中を旅していた。そんな中、十代の精霊であるネオスから以前倒した敵、『破滅の光』が再び動き出したことを知る。

『破滅の光』の目標は十代の世界とは別の平行世界。十代は相棒であるユベルとともにネオスの力で平行世界に行く。その平行世界で十代は13人のアイドルたちと出逢い……

デュエルはOCGルールで進めていきますが、初期ライフが4000だった表側守備で通常召喚もします。作者のもう1つの作品である「遊戯王GX ブレイヴ使いの転生者」に登場するオリカも登場する予定です。

ラスボスはGXで結局解決していない破滅の光事件の黒幕、破滅の光の意志です。たぶん憑依したキャラの中の人的にあの人に憑りつくかも。

注意事項（前書き）

このページは注意書きです。

注意事項

・この小説は遊戯王GXとアイドルマスターシリーズのクロスオーバーです。

・時系列は劇場版から3カ月後という設定にしています。あとオリ設定でそのころからGXの時代ではシンクロモンスターが登場した、というのがあります。

・ファラオと大徳寺先生は登場しません。ファラオは翔に預けて、大徳寺先生はあるきっかけで成仏したということになっています。ハネクリボーは……どうだろう？

・ルールは基本的にOCGのルールを採用していますが、初期ライフポイント4000で、表側守備表示で通常召喚もします。

・この小説はニコニコ動画に投稿されているアイマス×遊戯王（いわゆるユギマス）の動画や呉羽さん作の「遊戯王マスター・アイドル達の絆の繋がり」を参考にしているので似ている設定・展開があると思います。

・作者はアイマスの知識がありません。ユギマス・ノベマスやプレイ動画、アニメを見て知識を得ています。ゲームはPSPのゲームを数回やったきりです。

・デュエルではアニメ効果のカード、作者のもう1つの作品である「遊戯王GX ブレイヴ使いの転生者」で登場するバトルスピリッツのカード（未登場のカードも含む）やアニメ・漫画で登場したオリカが出ます。あと完璧オリジナルのカードも出します。

・レアリティは現実基準で、スターダスト・ドラゴンやレッド・デ
ーモンズ・ドラゴン、宝玉獣シリーズなど、世界に1枚だけのカー
ドは流通されています。ですが、E・HEROネオスとその関連の
カード、超融合、E・HERO関連のカードは十代だけが所持、と
いう設定にしています。序盤までで生産されているカードは「EX
TREM E V I C T O R Y」のカードまでとなっています。ちな
みにスターターデッキ2011のカードも流通しています。

・エクシーズモンスターは序盤は出ませんが、後々出す予定です。

・ユベルの性別は女。コレ絶対。なので1人称や性格が変化してい
ます。

・響と貴音は最初から765プロ。

以上のことが嫌な人はご注意を。

受け入れてくれる心の広い読者さんはプロローグ、もといTUR
N・1をどうぞ。

あと、わかりづらい説明でごめんなさい。

TURN・1…十代、平行世界へ（前書き）

ああ、やってしまった……「ブレイヴ使いの転生者」もあるのに……
…「ブレイヴ使いの転生者」は近日に更新予定です。

あと、今回はデュエルしません。

TURN・1 十代、平行世界へ

「よーっし、これでデッキ調整完了っ！ ユベル、デュエルの相手してくれよ」

東京都の某所にあるホテル、デュエルアカデミア本校のオシリス・レッド寮の制服を着た青年、遊城十代が組みなおしたデッキを試そうと、デュエルを持ちかけている。

十代が話しかけているのはユベルという悪魔のような容姿のデュエルモンスターの精霊。十代がデュエルアカデミア在学中に大きな事件を起こして、異世界で十代と融合した存在だ。今は十代の精霊としてサポートをしている。

で、デュエルを持ちかけられているユベルの反応は、

『十代、私はデュエルよりも食事をしたほうがいいと思うわ。そろそろお昼よ？』

「それもそうだな……。とりあえずカード買いに行きたいし、ホテルの外で食べるか。どうせもう出てくしな」

ユベルの言っていることももつともだ、と思った十代は組みなおしたデッキをバッグに入れて、それから取り出した最新型のノートパソコンでこの近くにあるファミレスなどを探す。

実は十代、ここらへんの地理は全くわからないのだ。

とりあえず、十代は近くにある有名なラーメン専門店に行くことを決めてノートパソコンを仕舞う。

バッグを背負い、部屋を出て行こうとする十代。が、十代はドアノブを握る前に何者かの気配がしたためあわてて振り返る。ユベルも気づいているようで、気配がする方を睨んでいる。

「何者だ!？」

「……驚かないでくれ。私だ」

ユベルと融合したお陰でオレンジと水色のオッドアイとなつて
いる十代に話しかけてきたのは、白主体の身体に頭と胸にクリスタル
を持つ某光の巨人似の容姿の十代の切り札的存在であるカード、《
エレメンタルヒーロー
E・HEROネオス》の精霊だつた。

もう何ヶ月も姿を現していなかったので、十代もユベルも驚きな
がらネオスが現れた理由を尋ねる。

「ネオス、どうして突然現れたのかしら? 理由を聞かせてもらえ
る?」

「俺もユベルに同意権だ。教えてくれ、ネオス」
「……わかつた」

ネオスはうなずくと、突然現れた理由を話し始める。

「率直に言うと——ヤツが、「破滅の光」が再び動き出したんだ」
「なっ……!？」
「『破滅の光』が!？」

話は変わるが、十代はデュエルアカデミアに在学中、4度の事件
を解決してきた。

1つはデュエルアカデミアの理事長、影丸が起こした3幻魔事件。
1つは世界を滅ぼす『破滅の光』の意志に操られた斎王琢磨が起
こした光の結社事件。

1つは当時、『破滅の光』に操られていたユベルが起こし、十代
も加害者となつた異次元世界事件。

1つはデュエルディスクにカードが読み込めないことから始まり、

行方不明となっていた青年、藤原優介と彼を洗脳していた『ダークネス』と呼ばれる存在が起こしたダークネス事件。

ネオスが言っている『破滅の光』とだけは決着がついていなかった。いつか行動を起こすとは予想していたが、今行動するとは十代は思ってもみなかった。

……このまま『破滅の光』を野放しにしていると世界が混乱するかもしれない。そう危惧した十代はユベルにアイコンタクトで会話すると、半透明になっているネオスに向き合って話をする。

「ネオス、詳しい話を聞かせてくれ」

『わかった。……ここ数年で力を蓄えていた『破滅の光』は平行世界^{ワールド}に介入して、その世界で世界を消滅させるつもりらしい。この世界に目をつけなかった理由は十代、きみがいるからだ』

『十代がいる……「破滅の光」の天敵である霸王がいるからのようね』

「そうみたいだな……。ネオス、俺たちはどう動けばいい？」

十代がそう聞くと、ネオスは少し考えをするような素振りを見せてから、ネオスの考えを十代とユベルに伝える。

『2人にはパラレルワールドに行って「破滅の光」を倒してもらいたい』

「おう、まかせろ！……とは言ってみたものの、平行世界ってどうやったら行けるんだよユベル!？」

『十代、私に聞かれても困るわよ……でも、ネオスの力なら何とかなるんじゃない?』

「どういうことだ?」

『ネオスペースの力を使って十代と私をその平行世界に飛ばす、ってことよ』

なるほどな、と十代は納得する。ネオスもうなずいてユベルの提案に賛成する。

『それでは、十代、ユベル、頼んだ。私は『破滅の光』の様子を探らなければいけないから平行世界には行けないかもしれない』

「まかせろよ。お前も頼んだぜ、ユベル」

『わかってるわ、愛しの十代のためだもの。私も十代のサポートをさせてもらっわ』

『2人とも、ありがとう。……それでは送るぞ』
「おう」

瞬間、ネオスから虹色のオーラ……ネオスペースの波動らしきものが部屋中に流れる。

（それにしても、ネオスってスゲエよな。前に『破滅の光』と戦ったときは剣山を宇宙まで連れてった、みたいなこと言ってたしな。それに平行世界を移動できるなんて……とてもワクワクすることじゃねえか！！）

十代はお気楽なことを考えているが、その決意はホンモノだ。そのためにも『破滅の光』を倒したい。それに、異世界で霸王の人格が消滅して以降1度も使っていなかった悪魔の英雄たちを使うきっかけになるかもしれない。

そして、虹色の光が十代と半透明のユベル、十代の荷物を包み込み、発光する。これが平行世界へ行く合図だろう。十代はそう思った。

光が部屋を支配する。

2人の意識が朦朧して、消えていく。

その中で十代は、ネオスの呟きを聞いた。

『十代、ユベル……世界を救ってくれ』、と。

『……！……代、十代……！……十代……！……』

ユベルの声を聞いて、十代はハッ！と目を覚ました。

十代はホテルの1室にいたはずだったのに、今は市民公園らしき場所のど真ん中にいるではないか。どうやら平行世界に到着したのだろう。

「ユベル、大丈夫か？」

『ええ、特に問題はないわ。……ここが平行世界みたいだけど、やっぱり元の世界とは変わらないわね』

「そりゃあな。似て異なる世界って言うし。そうだ、上に飛んでもらってもいいか？ 地理がわからないとどうにもならないし……とりあえず、ネットカフェあたりか安そうなホテルで頼むよ」

『了解よ。早めに終わらせるわね』

「ああ。頼んだぜ」

会話が終わり、ユベルは背中の中翼で街のほうに羽ばたく。

その間に十代は近くに落ちていた荷物を確認しようと、バッグを手取る。バッグの中にはノートパソコンとその充電器、デッキ、あまりのカード、残り少ない量のお茶が入っているペットボトル、デュエルアカデミアで支給されていたオシリス・レッド専用のデュエルディスク……十代がいた頃はオシリス・レッドの生徒は十代1人だけなので実質十代専用だが。あとは昨日買ったカードパック3

袋にその他。

とりあえず十代はペットボトルのお茶を飲み干して近くのゴミ箱に空のペットボトルを放り捨ててデッキやあまりのカードを確認する。十代だけが所有する《E・HEROネオス》やNネオスベーションやその関連カード、E・HEROが無くなっていないか確認するためだ。

適当に見ていったが、無くなっているカードはなかった。だが、少し気になっていることがあった。1枚しかないはずのネオスとその関連カードが3枚に増えているのだ。

E・HEROと関連カードは元々3枚あったのだが、ネオスや他のカードが3枚に増えているのは不可解だ。

どういうことが、と可能性を考えようと思ったときに、ユベルが戻ってきた。

「ユベル、どうだった？」

「ホテルは近くになかったけど、安料金のネットカフェはあったわ。その通りを左に曲がってすぐだから、案内するわ」

「おう。ありがとな」

ユベルに感謝しながら十代は荷物を背負おうとする。すると、1枚のメモ用紙が草むらに落ちていった。

十代はそれを拾うと、メモに書いてある文字を見ていく。

メモにはく十代へ、コンタクト融合デッキを作るならカードも増やしたほうがいいと思って、私やその関連カードを3枚に増やしておいた。有効に使ってくれ。ネオスより>と書かれていた。

「何て書いてあるの？」

「ネオスがカードを増やしてくれたんだってさ」

「へえ、粋なことやるのね」

ユベルが優しそうな笑みを浮かべながらそう言う。

「そんじゃ行くか」

『そうね。場所はこつちよ』

半透明の身体で行動しているユベルを追いかけて十代は草むらを歩いていく。

すると、ボカツ！！と木に拳を思い切り打ち付けるような聞こえた。気になったので十代は聞こえた方向にチラリと眼を向ける。見えたのは、不良らしき3人の少年に絡まれている2人の少女。十代がそれを見ているのに気がついたのか、ユベルも反応して、

『十代、あの2人を助けるの？』

「まあな。困ってる人がいたら助けるだろ、普通。それに不良の1人はデュエルディスクをつけている。たぶんデュエルで退いてもらえるだろ」

『……それで退いてもらえるんだったらデュエル万能説のでき上がりね』

ユベルは呆れながら姿を消す。

で、十代は赤いラインの専用デュエルディスクをつけてデッキをセツトすると、不良たちに近づいていき、

「おい、何やってるんだお前ら」

「何だデメエ。邪魔してんじゃねえよコラ！！」

「女の子が危ない状況に遭ってるんだ。助けるのは当然だろ？」

……言っていることがちょっとアレ(?)だが、十代が2人の少女を助けたいと思っているのには変わりない。

ちなみに2人の少女の容姿は、1人が黒髪ポニーテールで、もうもう1人が左右にピンク色のリボンをつけているショートヘアの少

女だ。

で、とりあえずお互いあーだこーだ言っていることになり、

「埒あかねえな……ならさ、デュエルで勝負しようぜ俺が勝ったら2人から離れる。俺が負けたら……俺のデッキとあまりのカード全て渡す」

「へっ、威勢がいいじゃねえか！ やっちゃってください横峯さん！」

「ちよっ……！ あんた誰だか知らないけど自分らのために全部のカード賭けるなんて……！」

「そうですよ！ もし負けたら！」

「大丈夫だいじょーぶ！ 絶対勝つって。信じてくれよ」

「そんじゃあ始めようぜ。一応名前を聞いておこうか。俺は横峯だ」
「俺は遊城十代だ！ 全力で行くぜ！」

互いのデュエルディスクが展開してソリッド・ヴィジョンシステムが起動する。

「デュエル……！」

TURN・1…十代、平行世界へ（後書き）

というわけですので、次回は序盤からデュエルです。

で、最後らへんに出てきた2人の少女……わかる人ならわかると思います、たぶん。なにせ口調がちよつと曖昧なんですよね……。

感想・誤字脱字の報告待ってます！

TURN・2…最強のプラネットVS正しき闇のHERO（前書き）

ようやく最新話更新です。遅れてすいません。

遅れた理由ですが、学校が忙しかったのと一昨日学校で音楽祭をやったので執筆する時間がありませんでした。

あ、そうそう。最後のほうですが、ちょっと他のユギマス動画の展開と似ているかもしれません。

それにしても響の口調が曖昧だ……

TURN・2…最強のプラネットVS正しき闇のHERO

十代と横峯、互いのデュエルディスクが起動、展開する。
後は開始宣言をするのみ……。

「デュエル!!」

開始宣言とともに2人はデッキトップからカードを5枚ドロースする。

十代は手札を確認しながら再びデッキトップに指を置く。

「俺のターン、ドロ―! まずはこいつだ。《E・HEROバブルマン》を準備表示で召喚するぜ! さらにバブルマンの効果、このカードが召喚に成功したとき自分フィールド上に他のカードが存在しない場合、俺はカードを2枚ドロ―する!」

《E・HEROバブルマン》(アニメ効果)

効果モンスター

星4/水属性/戦士族/攻800/守1200

手札がこのカード1枚だけの場合、このカードを手札から特殊召喚することができる。

このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功したときに自分フィールド上に他のカードが無い場合、デッキからカードを2枚ドロ―することができる。

現れたのは右腕に固定式の銃をつけた水の戦士。召喚時の効果で十代にドロ―させる。

バブルマンの効果でデッキからカードを2枚ドロ―した十代は、手札をざっと見てから、1枚のカードを手取る。

「カードを1枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン。《ヘルウェイ・パトロール》を攻撃表示で召喚する」

横峯がデュエルディスクにカードを読み込むと、警察の白バイに乗る悪魔が彼のフィールドに召喚される。

《ヘルウェイ・パトロール》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1600 / 守1200

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送ったとき、破壊したモンスターのレベル×100ポイントダメージを相手ライフに与える。

自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外することで、手札から攻撃力2000以下の悪魔族モンスター1体を特殊召喚する。

「バトル！ 《ヘルウェイ・パトロール》でバブルマンに攻撃する

！ ヘル・チエイス！」

「くっ……通すぜ」

「さらに《ヘルウェイ・パトロール》がモンスターを破壊したとき、破壊したモンスター×100ポイントのダメージを相手ライフに与える」

バブルマンを破壊した《ヘルウェイ・パトロール》の効果により十代のライフポイントが4000から3600へダウンする。

だが、バブルマンを破壊したことで、十代の伏せカード発動のトリガーを引いた。

「バブルマンが破壊されたことで罠^{トラップ}《ヒーロー・シグナル》を発動！ デッキからレベル4以下のE・HERO……《E・HERO

フェザーマン》を守備表示で特殊召喚するぜ」

《ヒーロー・シグナル》

通常罫

自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られたときに発動することができる。

自分の手札またはデッキから「E・HERO」と名のついたレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。

《E・HEROフェザーマン》

通常モンスター

星3 / 風属性 / 戦士族 / 攻1000 / 守1000

風を操り空を舞う翼を持ったE・HERO。天空からの一撃、フェザーブレイクで悪を裁く。

「ふん、そんなザコを壁にしたって意味無いぞ」

「そうかな？」

「……俺はカードを1枚伏せてターンを終了する」

「俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード、《融合》を発動！フェザーマンと手札の《E・HEROネクロダークマン》を融合する。現れる、深淵の闇に潜みし英雄！《E・HEROエスクリダオ》を融合召喚だ！！」

「なっ……！？属性HEROを持っていたのか！？」

《融合》

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

《E・HEROネクロダークマン》

効果モンスター

星5 / 闇属性 / 戦士族 / 攻1600 / 守1800

このカードが墓地に存在する限り1度だけ、自分はレベル5以上の「E・HERO」と名のついたモンスター1体をリリース無しで召喚することができる。

《E・HEROエスクリダオ》

融合・効果モンスター

星8 / 闇属性 / 戦士族 / 攻2500 / 守2000

「E・HERO」と名のついたモンスター + 闇属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在する「E・HERO」と名のついたモンスターの数×100ポイントアップする。

「エスクリダオの効果発動！ こいつは墓地のE・HERO1体につき100ポイント攻撃力を上昇させる。俺の墓地のE・HEROはバブルマン、フェザーマン、ネクロダークマンの3体。よって300ポイントアップ！ ダーク・コンセントレイション！」

「攻撃力は……2800!？」

「これなら勝てる。頑張ってください！」

《E・HEROエスクリダオ》 攻2500 ↓ 攻2800

エスクリダオから漆黒のオーラが発せられて、攻撃力が上昇する。……リバーズカードが気になるところだが、戦わなくては勝利を得られない。そう思った十代はリバーズカードを警戒し、攻撃宣言をする。

「行け、エスクリダオ！ 《ヘルウェイ・パトロール》に攻撃！」

ダーク

ディフュージョン

Dark Diffusion!!」

「チツ……」

《E・HEROエスクリダオ》が右腕のクローを飛ばし、《ヘルウエイ・パトロール》の白バイ共々激しく傷つけて破壊する。さらに超過ダメージにより横峯の残りライフは4000から2800へと大幅にダウンする。

バトルフェイズを終了させてメインフェイズへと移行した十代は手札を1枚取り出してデュエルディスク魔法・罨ゾーンのスロットにセットしてターンエンドを宣言する。

「横峯、だっけ？ お前のターンだぜ」

「くっ……。俺のターン、ドロー。手札から《おろかな埋葬》を發動する。デッキから2体目の《ヘルウエイ・パトロール》を墓地へ送る」

《おろかな埋葬》

通常魔法

自分のデッキからモンスター1体を選択して墓地へ送る。

横峯は《おろかな埋葬》を使って墓地肥やしとデッキ圧縮を同時に行い、デッキの《ヘルウエイ・パトロール》を墓地に送った。

墓地へ送った《ヘルウエイ・パトロール》はこのカードを除外して手札の攻撃力2000以下の悪魔族モンスターを特殊召喚することができる。悪魔族を中心としたデッキでは大いに活躍するだろう。十代は墓地に送られた《ヘルウエイ・パトロール》を見て、

（マズいな……《ヘルウエイ・パトロール》の効果で手札からモンスターを特殊召喚されたら一気に上級モンスターを召喚されたりシンクロモンスターの布石にされる……！）

だが、まだ4ターン目だよな、と少し安心しきってつばを飲む。

「さらに俺はモンスターを裏守備表示でセット、リバーズカードを1枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！ 《カードガンナー》を召喚！」

十代のターン、彼が召喚したのは赤を中心とした色をした小型の移動砲台《カードガンナー》。腕には2門のキャノン砲がついている。

《カードガンナー》

効果モンスター

星3 / 地属性 / 機械族 / 攻400 / 守400

1ターンに1度、自分のデッキの上からカードを3枚まで墓地へ送って発動する。このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで、墓地へ送ったカードの枚数×500ポイントアップする。

また、自分フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られたとき、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

「続けて《カードガンナー》の効果発動！ デッキトップからカードを3枚墓地へ送って《カードガンナー》の攻撃力を1500ポイントアップさせる！」

《カードガンナー》 攻400 ↓ 攻1900

効果によって十代のデッキから墓地に送られたカードは《ネクロ・ガードナー》、《E・HEROクレイマン》、《ヒーロー・ブラスト》の3枚だ。

相手モンスターを破壊する《ヒーロー・ブラスト》が落ちたのは

残念だが、墓地から除外することで相手モンスターの攻撃を無効にすることができる《ネクロ・ガードナー》が墓地に送られたのはラッキーだ。

「行け、エスクリダオで裏守備モンスターを攻撃！ Dark Diffusion！」

「くそ……だが破壊された裏守備モンスターは《クリッター》だ！ 《クリッター》がフィールドから墓地に行ったとき、デッキから攻撃力1500以下のモンスターをサーチする。俺はデッキからチューナーモンスター、《ダーク・スプロケッター》を手札に加える！」

「だが、《カードガンナー》の攻撃が残ってるぜ！ 《カードガンナー》、プレイヤーへダイレクトアタック！」

「^{トラップ}罠発動、《ガード・ブロック》！ この戦闘でのダメージを0にしてデッキからカードを1枚ドローさせてもらう」

《ガード・ブロック》

通常罠

相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動することができる。

その戦闘によつて発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

《カードガンナー》の攻撃が見えない壁に遮られ、横峯へのダメージが0となり、1ドローを許してしまう。

「……なら俺は、カードを1枚伏せてターンエンド」

「俺のターン、ドローだ。《BF - 精鋭のゼピュロス》^{ブラックフェザー}を召喚する」

《BF - 精鋭のゼピュロス》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1600 / 守1000

このカードが墓地に存在する場合、自分フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を手札に戻して発動する。このカードを墓地から特殊召喚し、自分は400ポイントダメージを受ける。

「BF - 精鋭のゼピュロス」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

「バトルフェイズへ移行し、ゼピュロスで《カードガンナー》に攻撃する！」

「通すぜ。そして破壊された《カードガンナー》の効果発動だ！このカードが破壊され墓地へ送られたとき、デッキからカードを1枚ドローできる。よって1ドローさせてもらうぜ」

「……勝手にしろ」

1枚カードがドローできたとはいえ、《カードガンナー》が《BF - 精鋭のゼピュロス》に戦闘破壊されたことで十代のライフは3600から2200にダウンする。

「カードを1枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！ エスクリダオ、行け！ 精鋭のゼピュロスに攻撃だ！」

「畏発動！ 《次元幽閉》！ エスクリダオは除外させてもらうぞ！」

「何ッ!？」

《次元幽閉》

通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動することができる。その攻撃モンスター1体をゲームから除外する。

「ならメインフェイズ2、手札から《沼地の魔神王》の効果を発動！ このカードを手札から墓地に捨てることでデッキから《融合》をサーチする！」

《沼地の魔神王》

効果モンスター

星3 / 水属性 / 水族 / 攻500 / 守1100

このカードを融合素材モンスター1体の代わりにすることができる。その際、他の融合素材モンスターは正規のものでなければならない。また、このカードを手札から墓地へ捨てることで、デッキから「融合」魔法カード1枚を手札に加える。

十代は《沼地の魔神王》を手札から捨てることで融合をサーチして手札に加える。

とりあえず今はメインフェイズ2のため、もうバトルフェイズは行うことができないが、攻撃力が高い融合モンスターを召喚することはできる。

「手札から2枚目の《融合》を発動！ 手札の《E・HEROスパークマン》と《E・HEROエッジマン》を融合！ 現れる、《E・HEROプラズマヴァイスマン》！！」

《E・HEROプラズマヴァイスマン》

融合・効果モンスター

星8 / 地属性 / 戦士族 / 攻2600 / 守2300

「E・HEROスパークマン」+「E・HEROエッジマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが守備表示モンスターを攻撃したとき、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

手札を1枚捨てることで相手フィールド上の表側表示モンスター1体を破壊する。

「俺はプラズマヴァイスマンの効果発動だ。手札を1枚捨てて《B F - 精鋭のゼピュロス》を破壊！」

「何！？ くっ……！」

「よし、カードを伏せてターンエンドだ」

「エンドフェイズ時、速攻魔法《終焉の焰》を発動！ 自分フィールド上に守備表示で黒焰トークンを2体特殊召喚するぜ！」

《終焉の焰》

速攻魔法

このカードを発動するターン、自分は召喚・反転召喚・特殊召喚することはできない。

自分フィールド上に「黒焰トークン」（悪魔族・闇・星1・攻/守0）2体を守備表示で特殊召喚する。

このトークンは闇属性モンスター以外のアドバンス召喚のためにはリリースできない。

《黒焰トークン》守0×2

速攻魔法、《終焉の焰》が発動したことにより、横峯のフィールド上に2体の黒焰トークンが特殊召喚される。おそらく壁だろう、と十代は予測した。

これで横峯のフィールドはトークン2体とリバースカードのみ。これなら何とか勝利できるかもしれない。

そして横峯のターンが回ってくる。

「俺のターン、ドロォ。魔法カード、^{マジック}《闇の誘惑》を発動する。デッキからカードを2枚ドロォした後に自分の手札から闇属性モンス

ターをゲームから除外する。俺は手札の《ダーク・スプロケッター》を除外だ」

「手札増強用のカードか……何か仕掛けてきそうだな」

《闇の誘惑》

通常魔法

自分のデッキからカードを2枚ドローし、その後手札の闇属性モンスター1体を選択してゲームから除外する。

手札に闇属性モンスターがない場合、手札を全て墓地へ送る。

横峯は2ドローしたあと、十代に《ダーク・スプロケッター》を公開してゲームから除外する。

そして、横峯は手札にある1枚のカードに手を掛ける。

「そして俺は、黒焰トークン2体をリリース！ 現れる俺の切り札、^ザThe ^{スプレマシー}supremacy ^{サン}SUN《を召喚！！》」
「The SUNかよ！？」

《The supremacy SUN》

効果モンスター

星10/闇属性/悪魔族/攻3000/守3000

このカードはこのカードの効果でしか特殊召喚できない。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた場合、次のターンのスタンバイフェイズ時、手札を1枚捨てることで、このカードを墓地から特殊召喚する。

黒焰トークン2体がリリースされる。そして背中に太陽の光を思わせるような輝きを放つ6枚の翼を持ち、太陽を表した存在だとは思えないほど真っ黒な身体を有する太陽の悪魔、《The supremacy SUN》が現れる。

十代が驚いた理由だが、十代の世界ではThe SUNをはじめとする惑星を模したモンスターカード――プラネット・シリーズのカードは世界に1枚ずつしかないカードだったため驚いたのだ。

ちなみに十代もプラネット・シリーズの1枚である地球を模した《E・HEROジ・アース》を持っている。パラドックスとデュエルをする数週間前に行われた世界規模の大会で優勝し、その賞品としてもらったのだ。

プラネット・シリーズが出てきたのは、この平行世界だと量産されてるのだろうと十代は納得する。

……話が反れたようで。

The SUNは十代のフィールドにいるプラズマヴァイスマンよりも攻撃力が高い。よって戦況をひっくり返されるだろう。

それに……

（俺が負けたら2人が厄介な目に遭うし……見過ごすわけにはいかねえよな！ ま、それもあるけど、The SUNと戦えるなんてとてもワクワクすることじゃないか！！）

……一応、最後のが本音である。

「バトル！ The SUNで《E・HEROプラズマヴァイスマン》に攻撃する！ SOLAR FLARE！！」
ソーラー フレア

「通すしかねえか……！！」

The SUNの攻撃により《E・HEROプラズマヴァイスマン》が破壊され、十代のライフが2200から1800にダウンする。

「メインフェイズ2、俺は手札から永続魔法《カードトレーダー》を発動して、墓地にあるゼビュロスの効果を発動。《カードトレー

ダー』を手札に戻して墓地から蘇生する。そして再び《カードトレーダー》を発動だ」

《BF - 精鋭のゼピュロス》攻1600

《カードトレーダー》

永続魔法

自分のスタンバイフェイズ時に手札を1枚デッキに戻すことで、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロウ！ よし、《ダンディライオン》を守備表示で召喚するぜ」

十代がデュエルディスクにカードを読み込む。すると、タンポポを模したような身体のライオン。たてがみ鬣は花弁となっていて、前足は葉となっている。

《ダンディライオン》

効果モンスター

星3 / 地属性 / 植物族 / 攻300 / 守300

このカードが墓地へ送られたとき、自分フィールド上に「綿毛トークン」（植物族・風・星1・攻/守0）2体を守備表示で特殊召喚する。

このトークンは特殊召喚されたターン、アドバンス召喚のためにはリリースできない。

「さらに俺はカードを1枚伏せる。ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロウ。《カードトレーダー》の効果は使用しない。

続けてバトルフェイズ、《The supremacy SUN》で《ダンディライオン》を攻撃。SOLAR FLARE!!」
「だが、《ダンディライオン》が墓地へ送られたことで守備表示で綿毛トークン2体を特殊召喚できる。こい、綿毛トークン!」

《ダンディライオン》が破壊されて十代のフィールドはがら空きになったが、《ダンディライオン》の効果でタンポポの綿毛を模した、綿毛トークン2体が現れる。

《綿毛トークン》守0×2

「壁が増えたか……だが、少しでも減らす! 精鋭のゼピュロスで綿毛トークンを破壊だ!」

「リバース罠、《フローラル・シールド》だ。相手モンスターの攻撃を無効にしてデッキからカードを1枚ドロースるぜ」

「くっ……止められたか」

《フローラル・シールド》（アニメ、タッグフォースTFオリカ）

通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動することができる。

相手モンスター1体の攻撃を無効にし、自分のデッキからカードを1枚ドロースる。

無数の花弁が《BF - 精鋭のゼピュロス》の攻撃から綿毛トークン1体を守る。そして十代はデッキから1枚ドロースる。

「チッ……ターンエンドだ」

「よし、俺のターン、ドロース……横峯だったつけ? このデュエル、俺の勝ちだ!」

「はっ、無理に決まってるだろ。俺のフィールドにはゼピュロスと

The SUNがいる。だがお前のフィールドは2体の綿毛トークンのみ。そんなお前がどう俺に勝つんだ？」

「まあ見てな。俺は手札から魔法カード、《ホープ・オブ・フィフス》を発動！ 墓地のE・HEROと名のついたカード5枚をデッキに戻してシャッフルした後、俺はデッキからカードを2枚ドロースする！」

「またドローカード！？ 一体お前、どんな強運の持ち主なんだ！？」

「さアね。俺は《E・HEROバブルマン》、《E・HEROフェザーマン》、《E・HEROエスクリダオ》、《E・HEROプラズマヴァイスマン》、《E・HEROスパークマン》をデッキに戻して2枚ドロースだ！」

《ホープ・オブ・フィフス》

通常魔法

自分の墓地に存在する「E・HERO」と名のついたカードを5枚選択し、デッキに加えてシャッフルする。その後、自分のデッキからカードを2枚ドロースする。

このカードの発動時に自分フィールド上および手札に他のカードが存在しない場合はカードを3枚ドロースする。

十代は《ホープ・オブ・フィフス》の効果で選んだE・HERO5枚をデッキに戻した後3回シャッフルして、デッキからカードを2枚ドロースする。

ドロースしたカードを確認して十代は笑う。勝利を確信した笑みだ。手札の真ん中にある1枚のカードを手にとり、十代は手札からそのカードを引き抜く。

「行くぜ！ 俺は2体の綿毛トークンをリリース。宇宙の正しき闇の力を持ちしHERO、《E・HEROネオス》を召喚だ！」

「え、《E・HEROネオス》だと!？」

「そんなカード聞いたことないよ! 響ちゃんは知ってる?」

「じ、自分も知らない! それにしてもE・HEROのカテゴリなのに見たこと無いカード……」

《E・HEROネオス》

通常モンスター

星7 / 光属性 / 戦士族 / 攻2500 / 守2000

ネオスペースからやってきた新たなE・HERO。ネオスペースアンとコンタクト融合することで、未知なる力を発揮する!

どうやらネオスはこの平行世界だと存在しないらしい、十代はそう認識した。

だが今はそんなことを気にしてる場合ではない。このデュエルに勝つこと、そしてこのデュエルを心から楽しむことを考える!

「さらに手札から装備魔法、《アサルト・アーマー》と《ネオス・フォース》を発動してネオスに装備! これでネオスの攻撃力は2500から3600に上昇するぜ!」

《アサルト・アーマー》

装備魔法

自分フィールド上に存在するモンスターが戦士族モンスター1体のみの場合、そのモンスターに装備することができる。

装備モンスターの攻撃力は300ポイントアップする。

装備されているこのカードを墓地へ送ることで、このターン装備モンスターは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃することができる。

《ネオス・フォース》

装備魔法

「E・HEROネオス」にのみ装備可能。

装備モンスターの攻撃力は800ポイントアップする。

装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送ったとき、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

エンドフェイズ時にこのカードをデッキに加えてシャッフルする。

《E・HEROネオス》 攻2500 ↓ 攻3600

そして十代はネオスに装備されている《アサルト・アーマー》を墓地へ送る。これによりネオスは攻撃力が3300にダウンするが、バトルフェイズ中に2度攻撃できるようになった。

「行け、ネオス！ 《The supremacy SUN》に攻撃だ！ フォース・オブ・ネオスペース！！」

ネオスが光を纏った拳でThe SUNに攻撃する。そしてThe SUNが戦闘で破壊されて、横峯は超過分のダメージ、300をライフに受け、残りライフを2500までダウンさせられる。

横峯は一瞬だけ、終わりか……？ と思った。だが、まだデュエルは終わっていない。

「《ネオス・フォース》の効果発動！ 装備モンスターが戦闘で相手モンスターを破壊したとき、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！ ネオスが破壊したモンスターは攻撃力3000《The supremacy SUN》！ よってお前に3000ポイントのダメージを与える！！」

「くそっ……俺の負けか……」

「ああ。でも楽しいデュエルだったぜ。ガッチャ！ またデュエルしような！」

十代は右の中指と人差し指以外を握り、横峯に向かって右腕を向ける。

横峯はデュエルディスクとデツキを仕舞って、自分の舎弟と一緒にその場を離れる。……「次は勝つ」という言葉を残して。

素直じゃねえな、と十代は心の中で横峯に対する感想を言う。

『素直じゃないところは十代にもあるでしょ？』

「う、うるせーな」

『フフツ……でもそういう十代も私は好きよ』

突然出てきてすぐ消えたユベルに対して十代は苦笑いを浮かべる。……まあでも、ユベルに好きと言われても嫌な感じはしない。むしろ嬉しい。前世で一緒だったからか、それとも……

そんなことを考えながらデュエルディスクをバッグに仕舞っていると、2人の少女が十代に走り寄ってくる。よく見ると、横峯たちから助けようとした2人だった。

「さつきはありがとうございます！ 私、天海春香って言います！」

「自分是我那覇響！ 助けてくれてありがとう、ええと……」

「俺は遊城十代。よろしくな、春香、響」

「よろしくお願いします十代さん。それで、助けてくれて本当にありがとうございます！」

「いいっていいって。……って、2人ともデュエルモンスターのやるのか？」

十代は響のズボンからはみ出ている、デュエルモンスターのカードを指差しながら言う。

「もちろん！ 自分たち、デュエルアイドルなんだ！」

「でも人気はあまり無いですけどね……」

「デュエルアイドル……？ 聞いたことねえな。それって何だ？」

「えっと、デュエルもするアイドルのことなんだ。結構知ってる人は多いんだけどな……」

「ははは……俺そっこの疎くて」

響の台詞に苦笑いしながら十代は思案する。

（デュエルアイドル、か。俺の世界では聞いたことないな。あ、前翔に俺がいないとき明日香がクロノス先生やナポレオン教頭にそんなことをやれって迫られてた、みたいなこと聞いたな）

今となつてはあまり興味ないことだな、と十代は思う。

それにしても、デュエルアイドルと言うのは十代の世界のプロリーグと同じくらい難易度が高く、春香と響の話を聞いていると、2人の所属している765プロダクションはその中でも弱小で765プロの社長が優秀なプロデューサーを募集しているらしい。

大体のことを言い終えた2人は、

「それで、さつき春香と話してたんだけど、十代さんに765プロでプロデューサーをやってくれないかなって話してたんだ」

「もしよろしければ、1度社長に会ってくれませんか？ あ、もちろん断つてもらってもいいですよ！」

「うーん、じゃあ少し考えてもいいか？」

「はい。いいよね、響ちゃん？」

「うん。あまり急いで答えを出してもらわなくてもいいさー」

そう言われて十代は腕を組み、考えているふりをする。一応考えは纏まっているので、相棒であるユベルと話し合っつもりなのだ。

(……っていうわけなんだけどさ。俺、2人の助けになりたいんだよな。それに……)

『プロデューサーをやりながら「破滅の光」の情報を集めたい、つてトコかしら?』

(流石は俺の頼れる精霊だ。というわけで……ダメ?)
『いいわよ』

(だよな……つてマジ!?)

『私はその考えいいと思うわよ。十代らしいし。それに言ったでしよ? 愛しの十代のサポートをするつて』

(……ありがとな)

『1度決めたんだから頑張りなさいよ』

以上、2分くらいで話し合いは終了した。……少しユベルらしくない言動かもしれないが。

とりあえず方針は決まった。あとは2人にプロデューサーになるということ伝えるだけだ。十代は握りっぱなしだったデッキをポケットに仕舞いながら、

「春香、響、社長さんに会わせてもらえるか?」

「……っていうことは……」

「ああ。765プロのプロデューサー、やらせてもらうぜ」

この後、春香と響の喜びの声が上がったのは言うまでもないだろう。

TURN・2…最強のプラネットVS正しき闇のHERO（後書き）

すいません、今回デュエルで使った《ネクロ・ガードナー》および《E・HEROネクロダークマン》の効果を使うの忘れてました。マジですいません……。あと《ヘルウェイ・パトロール》も。

とりあえず次回は登場人物紹介かもしれません。わからない人のために。

あと読者の皆さんに某動画サイトにアップされているユギマス動画を紹介してもらいたいです。はい。作者は先月末に遊星が主人公のユギマス動画を見たばかりなので。紹介してもらう場合はメッセージからお願いします。

ANOTHER TURN…登場人物紹介（前書き）

はい、登場人物紹介です。ストーリーが進み次第追記します。
使用デッキとエースモンスターはそのキャラがデュエルした後に追記します。

11/09…春香、響以外のアイドル、高木順二郎、音無小鳥を追加しました。あと響のところを追記。

ANOTHER TURN…登場人物紹介

遊城十代

本作の主人公。19歳。

未来のデュエリスト、不動遊星と過去のデュエルキング、武藤遊戯とともにパラドックスと名乗るデュエリストを倒して数カ月後、自分の精霊である《E・HEROネオス》の力で自分と融合した精霊、《ユベル》と平行世界へと飛んだ。

性格は冷静ながらも熱い心を胸に秘めている。デュエルを行うときはどんなことがあるうとも純粋に楽しんでいる。

チートドロの持ち主。フィールドと手札が1枚もない状態でも《ホープ・オブ・フィフス》や《E・HEROバブルマン》を使って一気に手札を補充することも。また、1ターンに複数回ドロースを使用することもある。

デュエル・アカデミア入学当時は元気一杯で天然なところもあったが4回も世界を救ったほどの人物。また、3年生のときにユベルによって飛ばされたい異世界でとあるきっかけで冷酷で非常な性格の霸王の人格に支配されて仲間を次々と葬ったこともあった。その後は『破滅の光』によって歪んだユベルとデュエルし、《超融合》のカードで自分とユベルの魂を融合、それから精霊の力を行使するなど、常人離れた力を得た。

ユベルとは仲がいいが、よく実体化して誘惑してくるのでかなり大変。

2年生の時にはふとしたきっかけで木星の衛星、イオで《N・アクア・ドルフィン》と出逢いネオスとその関連カードを手にする。

デュエルは主にHEROやネオスペーシアンを使うが、《カードガンナー》や《カードエクスクルーダー》、《ネクロ・ガードナー》などのカードも使用する。ちなみに神のカードである《ラーの翼神竜》を1度だけ使用したことがある。

デュエルキングである武藤遊戯に精霊の宿った《ハネクリボー》を譲り受け、学生時代は「相棒」と呼んでいて愛用していたが、ダークネス戦では《超融合》のコストとして手札から捨てられ、遊戯戦のときには最終ターンにドローされただけだった。ハネクリボー涙目。リアルでは、十代の中の人がハネクリボーを愛用していることで有名。

使用デッキはE・HEROにネオスペーシアンやE・HERO（未使用）、《カードガンナー》など全く関係ないカードも混合した【HERO】デッキ。エースモンスターは《E・HEROネオス》、《ユベル》。

ユベル

イメージ声優：日笠陽子

本作のヒロインの1人（冗談ではない）。年齢不詳

デュエルモンスターの精霊で十代のパートナー。原作では両性だったが、本作では完全な女性。ちなみに容姿は変わってないが声は変わっている。

幼い頃の十代のエースモンスター。当時は十代が他人とデュエルし敗北するたびに相手を意識不明の重体にするなど邪悪な性格。その後はいろいろあり宇宙に飛ばされた後『破滅の光』の波動を受け、歪んだ性格となる。そして十代とその仲間たちを異世界に誘い彼の仲間を次々と消す。が、十代とのデュエルで前世の記憶を思い出し、和解、十代と融合する。その後は十代によきパートナーとなりサポートしている。

十代の力を使わずに実体化が可能で、その際は「インフィニット・ストラトス」のヒロイン、篠ノ之箒の容姿となる。なお、この姿をする理由は本人曰く「何故か親近感が湧く」ということらしい。中の人的に。ちなみにスタイルの良さを活かして十代を誘惑することもしばしば。

十代を愛しており、自分の命を投げ出そうとも十代を守る覚悟をしている。

使用デッキは不明だがアニメでは「ユベル」デッキを使用。エースモンスターは自身である《ユベル》とその進化系である2体のユベルであると思われる。

天海春香

本作のヒロインの1人。

765プロダクションに所属するアイドルの1人。

髪につけている2つのリボンが特徴。ポジティブで素直、誰にでも優しい性格。だが、何も無いところで転んだりなど、よく転んでいる。ちなみに永続魔法、《つまずき》が発動しているわけではない。お菓子を作るのが得意。だが、母親がい無いとうまくいかないらしい。あと歌が好き。とてもうまい、というわけではないが皆からの評価は高い。

使用デッキは「クイックデブリダンディジャンクドッペル」。エースモンスターは《スターダスト・ドラゴン》、《シューティング・スター・ドラゴン》。

如月千早

本作のヒロインの1人。

とても真面目な性格で何事にも厳しいところがある。だが、本作では多少明るくなっていて、表情も柔らかくなっている。周りからは「歌姫」と評価されるほどの歌唱力を有する。それ故歌が得意で好きだが、やや歌に固執している部分がある。自分が興味ないことは冷淡。

弟の交通事故死がきっかけで家族関係が悪い方向に向かってしまい、それが原因で現在の性格となっている。が、新しくプロデューサー

として入ってきた十代や他のアイドルたちと交流していくうちに元の優しかった性格に戻っていかうとしている。

性格に反して意外と笑い上戸である。たまに十代が言う冗談でもすぐに笑ってしまうほど。

以外にも自分のスタイルを気にしており、特に胸の部分を気にしている。

使用デッキ、およびエースモンスターは不明。

萩原雪歩

本作のヒロインの1人。

性格はおとなしめでショートヘアの少女。臆病な性格を変えるためにトップアイドルを目指している。

彼女の家庭は「組織」に近く、そのため裏社会では有名な父親の名前を出せば相手をとてつもなく恐怖させることがあるらしい。容姿に似合わず、好きな食べ物は焼肉。あとお茶を愛飲している。

とあるきっかけから男性と犬が苦手となっている。男性に関しては男性恐怖症に近くなっている、拒絶はしないものの会話などが続かなく、犬に関しては小型犬ですらアウト。激しく落ち込むとどんなところでも穴を掘って埋まろうとする癖がある。

使用デッキ、およびエースモンスターは不明。

高槻やよい

本作のヒロインの1人。

とても明るい性格で、家族思いの少女。事務所内ではよく自分から自主的に掃除やゴミ捨てを行っている。父親の仕事が不安定で家族は7名と大家族なため、貧乏な生活をしている。アイドルになったのは少しでも生活を安定させようと思ったため。

5人姉弟の長女で、家族内からは頼りにされている。が、自分は「

兄のような人が欲しい」と思っている。

765プロに所属するアイドルとは誰とでも仲はいいが、特に伊織と仲がいい。

「うつうー」という口癖やお辞儀のときに両手を後ろに上げつつ頭を下げる仕種が特徴的である。ちなみに彼女がつけているカエルのポシエットには「べろちよろ」という名前がついている。

使用デッキ、およびエースモンスターは不明。

秋月律子

本作のヒロインの1人。

冷静で頭が切れる眼鏡っ娘。元々は事務員だったが人手不足によってアイドルにされた。現在は伊織、亜美、あずさの3人グループ「竜宮小町」のプロデューサーも勤めているため、事務所内では1番の働き者。

勝気な性格で言いたいことはハッキリと言うタイプである。根性論や精神論が好きではなく、合理性を重視している。意外と挑発に乗せられやすい。

機械系に強く、パソコンに精通している。盗聴器や発信機、自作のツールを作ってしまうほど。たぶん自作のデュエルディスクも作れるだろう。この技術が成長すれば某有名サイトで髪型をネタにされているメ蟹ニツク以上に成長するだろう。

使用デッキ、およびエースモンスターは不明。

水瀬伊織

本作のヒロインの1人。

目立つデコいつも抱いているウサギのぬいぐるみが特徴の少女。実は父親が水瀬産業の社長でお嬢様である。そのため、ちゃんとした教育を受けている。

我が倅な性格で怒りやすいが、テレビの前などでは猫を被っている。一方、身内や自分の親しい相手には優しいところもある。実は765プロのアイドル内では1番仲間意識が高い（冗談抜き）。気遣いも普通にできるが、それをほとんど表に出さないので皆からは「ツンデレ」と言われている。

上記に記述してあるがやよいと1番仲がいい。

上記のとおり、お嬢様なため欲しいカードはすぐに手に入る。

3人ユニット「竜宮小町」のメンバーの1人。ちなみにリーダーである。

使用デッキ、およびエースモンスターは不明。

三浦あずさ

本作のヒロインの1人。

所属アイドルの中で1番胸が大きくスタイルも抜群で最年長の天然な癒し系お姉さん。髪型、髪色は千早と同じ。だが、本作ではアイマス2を基準にしているためショートヘア。

ヨハン・アンデルセン以上の極度の方向音痴で、目的地とは別の場所や逆方向に歩くことがよくある。ヤバいときには九州や北海道、拳句の果てには外国まで行くことが極まれにある。ちなみに「とらたん」という名前の犬を飼っている。

アイドルになった理由は「運命の人に逢う」ためである。未だに見つかっていないが。

ちなみに恋愛に関しては奥手。「運命の人」が見つからないのはコレが理由かもしれない。

3人ユニット「竜宮小町」のメンバーの1人。使用デッキ、およびエースモンスターは不明。

双海亜美

本作のヒロインの1人。

所属アイドルの中では1番最年少の中学1年生。以前は双子の姉である真美と入れ替わりでアイドル活動を行っていたが、今は別々に活動している。主に暖色系の服を着る。

真美に比べるとフリーダムな性格。

他のアイドルはあだ名で呼んでいる。千早とあずさだけは名前の後に「お姉ちゃん」と呼んでおり、プロデューサーである十代を「兄ちゃん」と呼んでいる。

3人ユニット「竜宮小町」のメンバーの1人。
使用デッキ、およびエースモンスターは不明。

双海真美

本作のヒロインの1人。

亜美と同じく所属アイドルの仲でも1番最年少。上記のとおり、以前は亜美と入れ替わりでアイドル活動を行っていた。主に寒色系の服を着る。亜美と比べると我慢強い一面があり、声も若干だが低い。亜美同様、他のアイドルをあだ名で、千早とあずさを名前の後に「お姉ちゃん」と、十代のことを「兄ちゃん」と呼んで慕っている。
使用デッキ、およびエースモンスターは不明。

菊地真

本作のヒロインの1人。

パツと見れば男に見えなくも無いがちゃんとした女の子。そのため男性のファンよりも女性のファンが多い。
男性を欲していた父親の教育のお陰で一人称は「ボク」になって男性らしい行動が多いが、本心では女性らしくしたいと思っている。
ちなみに以前空手道場に通っていたことがあり、実力は黒帯初段の腕前とか。

乙女チックな思考を持ち、それ故少女マンガや可愛いものを集めていたりする。あと小心者で調子の乗る部分も無くは無い。

以前はそうでもなかったが、デュエルモンスターズを題材にしたアニメのキャラクターに憧れて髪を伸ばしている。デッキもオリジナルな部分も取り入れているがほぼ真似ている。

使用デッキは【インフェルニティ】。エースモンスターは《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》、《インフェルニティ・デス・ドラゴン》。

星井美希

本作のヒロインの1人。

金髪に染めたロングヘアとアホ毛、中学3年のわりにスタイルが抜群なのが特徴。

天才肌だが、面倒くさがり屋で飽きっぽくマイペースな性格。苦勞せずに育ってきたために楽をしてトップアイドルになりたいと発言している。世間知らずでもあるため、おかしいことを言う部分もある。それでも本気になれば実力を発揮する。

恋愛に関しては一途で、好きになった人には好意を隠さずにアタックする。この小説では主人公である十代が被害を受けるだろう。主にユベルの嫉妬などで。

口癖は「あふう」「……なの」。好物はおにぎりとキャラメルマキアート（作者も好物）。何かあればおにぎりを渡せば問題ない。

使用デッキ、およびエースモンスターは不明。

我那覇響

本作のヒロインの1人。

沖縄出身のアイドル。とても長いポニーテールの髪が特徴。本作では最初から765プロに所属している。

歌よりもダンスが得意だが、歌がニガテではない。レッスンでもダンスはミスが少ない。

自宅にはハムスターのハム蔵、セントバーナードのいぬ美をはじめとする動物をたくさん飼っている。動物とは仲がいいが、エサをつまみ食いしたりして逃げられることもしばしば。

使用デッキ、およびエースモンスターは不明。

四条貴音

本作のヒロインの1人。

響と同じく、本作では最初から765プロに所属している。

出身などは不明だが、どこかの令嬢であるらしい。律儀な性格だが、気高く振舞うが繊細で優しい一面もある。見た目によらず大食いである。ちなみに好物はラーメン（作者も好物）。

横文字と機械が不得意。あと目があまり良くないらしい。

所属アイドルの中では響と1番仲がいい。休日にはお互いの家に遊びに行っているとか。

使用デッキ、およびエースモンスターは不明。

高木順二郎

765プロの前社長である高木順一郎の従兄弟。

過去にプロデューサーとして活動していたらしいが、詳しいことは不明。

デュエルの腕は十代と対等に戦えるほど。十代のようなチートドロ―は持っていないが、アンティーク・ギアを中心としたデッキで相手を翻弄する。

使用デッキは【アンティーク・ギア古代の機械】。エースモンスターは《アンティーク・ギア古代の機械巨人レム》と《アンティーク・ギア古代の機械究極巨人レム》の2体。

音無小鳥

765プロの事務員。

緑色の事務員服を着用していてインカムをつけている。インカムで隠れているが口元にホクロがある。

仕事はサボってばかりで、サボっている間は常に妄想している。ちなみに妄想の内容はいろいろ。亜美と真美から「ピヨちゃん」、響からは「ピヨ子」とあだ名で呼ばれている。

詳しいことは不明だが、過去にアイドルとして活動していたことがあるらしい。

使用デッキ、およびエースモンスターは不明。

ANOTHER TURN…登場人物紹介（後書き）

次回からは本編に戻ります。

で、皆さんにアンケートです。アンケート内容はアイドルたちのデッキのことです。

一応決まっているキャラもいるのですが……以下の一覧は決まっているキャラのデッキです。社長や小鳥、876プロのアイドルもデユエルする予定なので書きます。

- ・千早…【リチュアZero】
- ・律子…リアル・ジエネクス軸の【ジエネクス】
- ・伊織…【ライトロード】
- ・あずさ…【代行天使】
- ・亜美…【魔轟神】
- ・真美…【暗黒界】
- ・真…【インフェルニティ】
- ・響…【ライトニング・トライコーン】
- ・貴音…【絵札の三銃士】
- ・高木社長（順二郎）…【古代の機械】
アンティーク・ギア
- ・小鳥…【ハーピー】
- ・絵理…【フォーチュンレディ】
- ・涼…《Dragon D・END》軸の【D・HERO】

……となっています。社長に関してですが、真似するしかなかったんです……！ 社長のデッキが全く思いつかなかったの……。

なので、春香、雪歩、やよい、美希、愛のデッキをアンケート（？）で募集したいと思います！ なお、作者が決める基準は『キャラの

イメージに合ったデッキ』を優先しています。

それでは皆さん、お願いします！　なおアンケートについてはメッセージからでもOKです。

TURN・3…究極の機械巨人VS混沌の覇者（前書き）

ようやく更新です。

それで、皆さんに2つ報告があります。

1つはTURN・2で一部のキャラクターのデッキを紹介しましたが、絵理だけ「フォーチュンレディ」から「テックジーナス」に変更します。理由は「フォーチュンレディ」が絵理のイメージに合っていないです。納得いかないようですが、ご了承ください。

2つ目は過労死で有名なネオスのことです。十代のデュエルでは必ず1度はネオスを召喚させようと思っています。

それと、今回は15663文字もあるのでかなり長いです。……前後編に分ければよかったかな？

あと、アイドルたちの服装などはアイマス2やアニメに準じています。

TURN・3…究極の機械巨人VS混沌の覇者

公園から少し離れた街並みを眺めながら十代は春香と響、2人のアイドルに連れられて彼女らの所属する765プロダクションの事務所があるビルに向かっている。

場所は十代がいた公園からさほど離れてないらしく、公園から300メートルほどの数階建てのビルの3階が765プロの事務所らしい。

「十代さん、もうそろそろで着きますよ！」

「おう、わかった」

突然春香から話しかけられたが、そろそろ着く、という単語を理解してそれにあった台詞を返す。

すると、今まで現れてなかったユベルが半透明な姿を現す。……人の姿で。

『十代、見えてきたわ。そこに壁が黄色く塗装されたゲームショップがあるでしょ？ その右隣のビルよ』

（ふーん、教えてくれてありがとよ。えーっと……マジで……？）

ユベルがあるビルに指を差して、十代は指差したほうを見る。

そこに見えたのはいかにもありそうな若干ボロい3階建ての小さなビル。十代はそのビルを見て「ビルになったオシリス・レッド寮みたいだな……」と思ったのはナイショだ。で、そのビルの3階にビニールテープで765と書かれているのが見える。そこが765プロの事務所なのだろう。

思ってたよりボロい。コレが十代の正直な感想だった。……このこと言ったら絶対社長さんに怒られるだろうなー、とも思っている

が。

ビルはもう横断歩道を渡ればすぐ。信号が青になると3人はすぐにビルの前へと到着した。

「十代さん、ここが765プロの事務所だぞ！」

「へえ……」

「？　どうかしました？」

「あ、いや、俺が昔住んでた寮に雰囲気似てるなー、って思っただけだから。そんじゃ入ろうぜ」

今の十代の発言で2人は、どれだけ十代が貧乏な生活を送ってきたのか、と軽く疑問に思ったがスルー。とにかく今は765プロの社長と会ったのが先だ。

階段を上がって3階へ。

3階まで上り、十代は足を進めるのを止める。

「あのさ、春香、響、悪いけど話し付けて来てくれるか？　流石に無断だと悪いじゃん？」

「それもそうですね。じゃあ行く、響ちゃん」

「そうだな。んじゃ十代さん、ここで待っていてくれよな」

「わかってるって」

十代とのやり取りが終わると春香と響はドアを開けて事務所の中に入る。

壁に寄りかかっていた十代はバッグからネオスペーシアンとコンタクト融合体のモンスターを数枚取り出す。ネオスがカードを増やしてくれたとはいえ、どのカードが増えたのか全てわかっていないのだ。

ちなみに、取り出したカードの中には最初に使用したネオスペーシアンである水属性の《N・アクア・ドルフィン》や炎属性のパワ

ータイプなコンタクト融合体、《E・HEROフレア・ネオス》のイラストがある。

「……やっぱりネオスペーシアンは全部増えてるか。コンタクト融合体も《E・HEROゴッド・ネオス》以外は全部3枚あるな。なんでゴッド・ネオスが1枚しかないかはよくわかんないけど」

十代は苦笑すると、再びバッグの中を漁っていく。

この後、《E・HEROゴッド・ネオス》の効果が変化して、出しやすくなっていたことに気づくのはすぐであった。

同時刻、765プロの事務所内、戻ってきた春香と響は社長である高木順二郎を探すため事務所をうろついていた。

「なあ春香」

「何響ちゃん？」

「ピヨ子に聞けば社長がどこにいるかわかるんじゃないのか？」

「あ……それもそうだね」

そういえば小鳥さんいるの忘れてたなあ……と春香は若干苦笑いする。

ちなみに小鳥、とはこの事務員である音無小鳥のことだ。仕事はよくサバリアレな妄想をしていることが多い。何故解雇されないのかよくわからない人物である。

……とにかく、小鳥なら何か知っているとあった2人は彼女を探す。幸いこの事務所は狭いためすぐに見つかった。

「あの小鳥さん、社長がいつ帰ってくるかわかりますか？」

「え？ えっと、もう社長は帰ってきてるわよ。2人が戻ってくる10分くらい前にね。でも何でそんなことを？」

「実は社長に会わせたい人がいるんだ」

「会わせたい人って？」

「実は私たち、さつき遊城十代さんって人に不良から助けてもらってたんですよ」

「それで自分らのことを話したら『プロデューサーになってもいい』って言ってくれたんだ！ そうだよな春香？」

「うん。それで、社長さんに会わせるって話になって……」

その後も少しの間だけだが高木社長を探した経緯を小鳥に話す春香と響。

話はわかった小鳥は、

「じゃあ私は社長に話をつけてくるから2人はその遊城さんと呼んできてくれる？」

「わかったぞ。十代さんは自分が呼んでくるぞ」

「お願いね響ちゃん」

小鳥は社長室に行き話をつけに、響は玄関で待っているであろう十代を呼びに行く。

響がドアを開けてみると、見たこと無いカードを広げている十代が見えた。その十代もドアを開ける音で響に気がついた。

「お、どうだった響？」

「今うちの事務員が社長に話をしているぞ。それにしても見たこと無いカードが多いな」

「まあ、な。とりあえず入っていいんだろ？ そんなじゃ入らせても

らうぜ」

カードをさつさと片付けた十代は響と一緒に765プロの事務所へ入った。このとき十代は「やっぱりオシリス・レッド寮に似てるな……」と誰にも聞こえないように呟いたのはナイショだ。

十代が事務所に入って数分。響に会議室に案内されて765プロの社長を待っていた。

（うーん……社長さんってどんな人だ？ 鮫島校長みたいな性格だ
といいけどな）

……今みたいなことを考えているからして、確実に緊張をしていない。デュエル・アカデミアに在籍していたときにいろいろあったからなのか。

そろそろ来るかな？ と十代が思っていたとき、丁度会議室の扉が開く。

会議室に入ってきたのは、黒がかかった茶色のスーツを着た壮年の男性だった。おそらく彼が高木社長なのだと十代はすぐに気づいた。

「待たせてすまなかったね。私が765プロダクションの社長の高木順二郎だ」

「俺は遊城十代。よろしくな、社長さん」

「うむ、よろしく頼むよ十代くん。それで1ついいかね？」

「いいけど……何ですか？」

「きみが天海くんと我那覇くんを助けるために挑んだデュエルで使ったカード……確か《E・HEROネオス》だったかな？ そのカード、どこで手に入れたんだい？」

「……………悪いけど、今は言えないです」

今の十代の台詞で問題はないだろう。もし本当のこと、「木星の衛星、イオで手に入れた」なんて言っても信じてはくれないだろう。そのことを考えて十代はあえて「言えない」と言った。

「そうか。……これ以上は追求しないよ。言ってくれるときを待ってる。それよりも、きみは本当に我が社の力になってくれるかい？」
「おう！ 勿論だぜ。単純って思われるかもしれないけど、俺はあいつらの助けになりたい。って言ってもまだアイドルは2人しか知り合っていないですけどね」

ハハハ……と十代は苦笑する。
それを見て高木は、

（飄々した態度だが、ちゃんとした信念を持っている。……彼なら）

何かを確信した高木は1度深呼吸すると、座っていた席から立って十代に視線を向ける。

「十代くん、目的は、彼女たちを芸能界のトップへと導くことだ。道は険しいだろうが、頑張ってくれたまえ」

「……ってーことは、採用！？」

「うむ。これから一緒に頑張っていこう、十代くん」

「ああ！ これからよろしく頼むぜ社長さん！」

高木が十代に手を差し伸べる。十代も右手を出して高木と握手す

る。

とりあえず荷物を持った十代はドアのほうに視線をやり、

「おい、誰だか知らないけど覗くのはよくねえぞ」

「「「「「ギクツ!?」「」「」」」」」

擬音を言葉にするのって始めて聞いたな、なんて十代は心の片隅で思いながらドアを開けて社長室に入ってきた5人を見た。

そのうち2人は十代も見知っている春香と響。

1人はイヤホンをつけて、緑色の事務員が着そうな服を着用して紫の蝶ネクタイをつけている20代くらいの年齢の女性。十代は彼女を見て、おそらく響が言ってた音無小鳥って人だな、と思っている。どうでもいいが正解である。

残りの2人は幼い顔立ちの少女。おそらく小学6年から中学1年だろう。たぶん容姿が酷似していることからこの2人は双子なのだろうと十代は予測する。ちなみに2人の格好はピンク色の袖なしパーカーにこの世界のブランド物の長袖の服を着ている。唯一違うのは髪形。どちらもサイドテールなのは共通しているが、1人は短く十代から見ると左側に結んでいて、もう1人は長く十代から見ると右側に結んでいる。おそらくこの2人もアイドルなのだろうと十代は推理する。

「あはは……バレてました?」

「ああ。ちょっとだけけど声が聞こえたからな」

「兄ちゃんって耳いいんだね」。凄いね亜美!」

「うんうん! きつと兄ちゃんデュエルも強いんだよ!」

……どうして耳の良さからデュエルの強さに行き着くのかはわからないのはスルーで。

とりあえず十代は2人の名前でも聞こうと思い、

「なあ、2人の名前は？俺は遊城十代。今日から765プロでプロデューサーをすることになった。よろしく頼むぜ！」

「亜美は双海亜美だよ！趣味はゲームとデュエルモンスターズ。よろしくね兄ちゃん！」

「真美は双海真美。デュエルモンスターズが好きな中学1年生！兄ちゃんよろしく！」

「おう！機会があればデュエルしようぜ！で、あなたは？」

「あ、申し送れました。もうご存知かと思いますが私、765プロの事務員の音無小鳥です。よろしくお願いしますね、プロデューサーさん」

「俺は遊城十代です。よろしくな、小鳥さん！」

自己紹介も終わったところで以上の光景を見ていた高木はあることを思いつくと、十代に話しかける。

「十代くん、どうだい？私と1度デュエルしてみないかい？きみの实力を知っておきたい」

「おっ、いいのか？やろっぜ社長さん！でもどこでデュエルする？」

「近くに広場があるからそこでやろっ。十代くん、それでいいかね？」

「んじゃ決まりだな。そこでやろっぜ。あ、そうだ。お前らも来るのか？」

「亜美も行くよ。兄ちゃんのデュエル見てみたいし。ねー真美？」

「そーだよね亜美！」

「自分も行くぞ！」

「私も。また十代さん……プロデューサーさんのデュエル見てみたいし」

「私はまだ仕事があるから行けないわね。春香ちゃん、帰ってきた

らどんなデュエルだったか教えてくれるかしら？」

「あ、はい。わかりました」

そんなこんなで会議室に来ていた小鳥以外のメンバーで広場へ行くことになった。

十代は高木がどんなデッキで挑んでくるのか終始ワクワクしていた。

広場に到着した十代たち。

十代と高木はデュエルディスクを腕につけて数メートルほど距離をとる。春香、響、亜美、真美の4人は2人から距離をとりデュエルを見学する。

「そんじゃ、いくぜ社長さん！」

「こい十代くん。どこからでもかかってきたまえ！」

そしてお互いにデュエルディスクから初期手札であるカード5枚をドロースる。

2人はデュエルディスクを構えて、静かに言葉を紡ぐ。

「デュエル！！」

デュエルの開始宣言の後、十代はデッキトップに指を置く。

「先行はもらうぜ。俺のターン、ドロース！ 《E・HEROエアー

マン》を攻撃表示で召喚するぜ。さらにエアーマンの召喚時、デッキからHEROと名のついたモンスター1体をサーチできる！」

「初手はエアーマンでデッキからHEROをサーチ……テンプレするぞ」

「でもでもひびきん、サーチカード無しでエアーマンを手札に加えるほうに驚くべきじゃない？」

「確かに初手でエアーマンはあまりないもんね……」

「ふうん。とにかく俺はデッキから《E・HEROプリズマー》を手札に加えるぜ、社長さん」

《E・HEROエアーマン》

効果モンスター

星4 / 風属性 / 戦士族 / 攻1800 / 守300

このカードが召喚・特殊召喚に成功したとき、次の効果から1つを選択して発動することができる。

- 自分フィールド上に存在するこのカード以外の「HERO」と名のついたモンスターの数まで、フィールド上に存在する魔法または罫カードを破壊することができる。

- 自分のデッキから「HERO」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

十代のフィールドにサーキュレーターがついた機械の翼をつけた風のヒーローが現れる。そして、エアーマンの召喚が成功したことで十代はデッキから《E・HEROプリズマー》を手札に加える。

「んじゃ、俺はターンを終了するぜ」

「それでは、私のターンだね。ドローするよ」

十代のエンド宣言の後すぐに高木はデッキトップからカードを1

枚ドローする。高木はそのままドローしたカードをデュエルディスクに読み込む。

「私は手札から《磁石の召喚円LV2》^{マグネット・サークル}を発動するよ。この効果で手札から《古代の歯車》^{アンティーク・ギア}を守備表示で特殊召喚だ。さらに私は手札の《古代の歯車》^{アンティーク・ギア}の効果で攻撃表示で特殊召喚をするよ」

《磁石の召喚円LV2》^{マグネット・サークル}

通常魔法

手札からレベル2以下の機械族モンスター1体を特殊召喚する。

《古代の歯車》^{アンティーク・ギア}

効果モンスター

星2/地属性/機械族/攻1000/守800

自分フィールド上に「古代の歯車」^{アンティーク・ギア}が表側表示で存在するとき、手札からこのカードを攻撃表示で特殊召喚することができる。

高木は低レベルの機械族モンスターを特殊召喚する《磁石の召喚円LV2》^{マグネット・サークル}と同名カードが表側表示で存在する場合に特殊召喚できる《古代の歯車》^{アンティーク・ギア}のコンボで2体のモンスターをフィールドに揃えた。

十代は今のコンボを見て驚く。そして純粋に楽しんでいる。

（へえ、クロノス先生と同じ【古代の機械】^{アンティーク・ギア}デッキか！ それに同じコンボまで使うなんて……うおー！ ワクワクしてきたーッ！！）

そして高木は1番端にあるカードを手取る。

「さらに私は2体のモンスターをリリースして《古代の機械巨人》^{アンティーク・ギアゴーレム}を召喚だ！」

「後攻1ターン目から最上級モンスターを出すなんて……さすが社長だなあ」

「2ターン目でギアゴーレム！ こりゃ満足するしかねえ！！」

……十代が某チーム満足のリーダーの真似を知らず知らずにして
いるのはスルーしよう。

アンティーク・ギアゴーレム

《古代の機械巨人》

効果モンスター

星8/地属性/機械族/攻3000/守3000

このカードは特殊召喚できない。

このカードが守備表示モンスターを攻撃したとき、このカードの攻撃力が守備表示モンスターの守備力を超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。

2体の歯車が瞬間的に消えると、鈍い色の鋼でできた大型の巨人が現れる。

……十代の恩師でもあるクロノス先生が切り札として愛用していたカード。そのカードと再び対峙できることに喜びを感じていた。

そしてバトルフェイズ。もちろん動きがあった。

「それでは、《古代の機械巨人》でエアーマンに攻撃！ アルティメット・パウンド！」

巨大な鋼の拳が《E・HEROエアーマン》を襲う。エアーマンは一撃で粉砕されて、超過ダメージが十代を襲う。

4000のライフポイントが2800にダウンしてしまう。かなり減らされたわけではないが、ライフ4000だと数回の戦闘でデ

ユエルが終了してしまう。

「私はターンエンドするよ」

「俺のターン、ドロー！ マジック、《コンバート・コンタクト》を発動するぜ。自分フィールド上にモンスターがいないとき、手札とデッキから1枚ずつネオスペーシアンと名のついたカードを墓地に送って2枚ドローする。俺は手札から《ネオスペーシアンN・グロー・モス》を、デッキから《N・ブラック・パンサー》を墓地に送り2枚ドローするぜ」

「ネオスペーシアン？ それもネオスと同じように見たこと無いカードだね……」

「あのカードたち、結構レベル低いね、亜美」

「うん。珍しいカードだからもつと強いと思ったけどなー……」

《コンバート・コンタクト》

通常魔法

このカードは自分フィールド上にモンスターが存在しない場合のみ発動することができる。

自分の手札及びデッキから1枚ずつ「ネオスペーシアンN」と名のついたカードを墓地に送り、デッキをシャッフルする。その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

十代は2体のネオスペーシアンを墓地に送ってデッキをシャッフルした後にカードを2枚ドローする。

ドローしたカードを見て、十代は笑みを浮かべる。今は十代の前にすら姿を現さずにデュエルを見ているユベルや目の前で2人のデュエルを見ている響はいいカードが引けたのだと予測する。

「行くぜ社長さん！ 俺はカードを1枚伏せて《カードガンナー》を守備表示で召喚だ！ さらにカードガンナーの効果を使ってデッ

キトップからカードを3枚墓地に送らせてもらっぜ」

「墓地肥やしか……」

「《カードガンナー》に伏せカードって……兄ちゃんそんなに手札悪いのかなあ？」

「うっん、違うと思うよ亜美」

「そうだな。まだプロデューサーの目は諦めてないぞ」

響と春香の言うとおりだった。傍から見れば《古代の機械巨人》を前に守備力の低いモンスター1体に伏せ1枚はほぼ負けと言ってもいい。だがそれでも十代の瞳には「勝機はある」と写っている。

十代は笑みを浮かべながらエンド宣言。ターンプレイヤーは高木に移った。

ちなみに《カードガンナー》で墓地に送られたカードは《E・HEROエッジマン》、《E・HEROバーストレディ》、《ネクロ・ガードナー》の3枚だ。

「私のターン、ドロ。まずは《トレード・イン》を発動。手札にある《古代の機械巨人》アンティーク・ギアゴレムをコストに2枚ドロさせてもらっよ」

「手札交換カードか……へへっ、楽しくなってきたぜ」

「そうだね。やはりデュエルは楽しいものだ」

《トレード・イン》

通常魔法

手札からレベル8のモンスターカードを1枚捨てる。自分のデッキからカードを2枚ドロする。

高木と十代は笑いあう。

で、高木はカード効果で手札にある《古代の機械巨人》をデュエルディスクの墓地ゾーンに送ってデッキトップからカードを2枚ドロする。

そしてメインフェイスは何もせず、高木はバトルフェイスへ移る。

「バトル！ 《古代の機械巨人》で《カードガンナー》を攻撃！」
「この瞬間、墓地の《ネクロ・ガードナー》の効果を発動！ このカードを墓地から除外して《古代の機械巨人》アンティーク・ギアゴレムの攻撃を無効にするぜ！」

「何と！？ カードガンナーの効果で墓地へ送っていたようだね」
「ああ。《ネクロ・ガードナー》を除外」

《ネクロ・ガードナー》
効果モンスター

星3 / 闇属性 / 戦士族 / 攻600 / 守1300
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。
相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

十代が墓地から《ネクロ・ガードナー》のカードを除外すると《古代の機械巨人》の攻撃から半透明の姿で《カードガンナー》を守る。

「む……また破壊できなかったか。メインフェイス2、《カードトレイダー》を発動してターンエンド。十代くんのターンだ」
「おう！ 俺のターン、ドロー。こい、《E・HEROプリズマー》を召喚だ！」
「おー、プリズマー！ お値段高いから中々見かけないんだよねー」
「まあ効果が強いからな」

十代は真美と響のやり取りを聞いて、この世界ではプリズマーのシングルの値段が高いことを知る。まあ、今のデュエルには何も関係ないが。

2人の会話の後、全身が結晶となっていて《プリズマン》に似た

HERO、プリズマーが現れる。

《E・HEROプリズマー》

効果モンスター

星4 / 光属性 / 戦士族 / 攻1700 / 守1100

自分のエクストラデッキに存在する融合モンスター1体を相手に見せ、そのモンスターにカード名が記されている融合素材モンスター1体を自分のデッキから墓地へ送って発動する。このカードはエンドフェイズ時まで墓地へ送ったモンスターと同名カードとして扱う。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「俺はプリズマーの効果を発動！ エクストラデッキから《E・HEROブラック・ネオス》を相手プレイヤーに公開してデッキから《E・HEROネオス》を墓地へ送るぜ。リフレクト・チェンジ！」

「おお、コレが《E・HEROネオス》か……」

「かつくいー！ 亜美、ネオスちよーカッコいいね！」

「うんうん！ でもウル・ラマンみたいだねー」

「あはは……」

十代はエクストラデッキからコンタクト融合体のうちの1体、闇属性の《E・HEROブラック・ネオス》を高木に公開してネオスをデッキから墓地へ送る。

すると、プリズマーの身体が発光し、そこからプリズム体の《E・HEROネオス》が姿を現す。

「カードガンナーの効果を使ってデッキからカードを3枚墓地へ送るぜ」

墓地へ落ちたカードは《H・ヒートハート》、《E・HEROF

オレストマン》、《E・HEROワイルドマン》の3枚だ。
さらに十代は言葉を続ける。

「さらに罠カード発動、《等価交換》！ 自分フィールド上に存在するレベル3以下のモンスターを選択して発動する。墓地から選択したモンスターと同じレベルのモンスター1体を特殊召喚して選択したモンスターを破壊する。俺は《カードガンナー》を選択して墓地から《N・グロー・モス》を特殊召喚。カードガンナーは破壊される。けど、破壊時の効果でカードを1枚ドローさせてもらっぜ」

《等価交換》（オリカ）

通常罠

自分フィールド上に表側表示で存在するレベル3以下のモンスター1体を選択して発動する。

自分の墓地から選択したモンスターと同じレベルのモンスター1体を特殊召喚し、選択したモンスターを破壊する。

このカードの効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効となる。

《N・グロー・モス》

効果モンスター

星3 / 光属性 / 植物族 / 攻300 / 守900

このカードが戦闘を行う場合、相手はカードを1枚ドローする。この効果でドローしたカードをお互いに確認し、そのカードの種類によりこのカードは以下の効果を得る。

- モンスターカード：このターンのバトルフェイズを終了させる。
- 魔法カード：このカードは相手プレイヤーに直接攻撃することができる。
- 罠カード：このカードは守備表示になる。

カードガンナーが破壊されて、その代わりにヒカリゴケの名を持

つ光属性のネオスペーシアン、グロー・モスが姿を現す。新たなモンスター、ネオスペーシアンが召喚されたことにより春香たちはさらに驚く。

「あれがネオスペーシアン!? もうちょっとカッコいいと思ったんだけどなー。ねー真美」

「ねー亜美」

「2人ともそう言うもんじゃないぞ」

「どーしてひびきん?」

「もしかしたらすごい効果を持つてるかもしれないだろ? ……ま、まあ今は効果無効になってるけど」

「そうだけ亜美に真美。グロー・モス……いや、ネオスペーシアンたちはスゲエ力を持つてるんだぜ。それを今から見せてやるよ。社長さんたちも驚くなよ?」

「ふむ……ネオスペーシ안의力、見せてもらうよ十代くん」

高木の言葉に「見せてやるぜ!」と言わんばかりに十代は楽しいデュエルを進めていく。

今はその1歩として、新たな融合を見せる。

「行くぜ、コレが新たな融合だ! 俺はネオスとなつた《E・H E R O プリズマー》と《N・グロー・モス》をコンタクト融合!」

「コンタクト融合!」

「《融合》カードを使わない召喚方法があつたなんて……!」

「亜美亜美、やっぱりひびきんと兄ちゃんの言うとおり凄い能力持つてるよネオス!」

「うん! 何かかっくいーかも!」

「プロデューサーさん、頑張つて……!」

空へと飛び上がったプリズマーとグロー・モス。2体のモンスター

「I が折り重なり、新たな力を紡ぎだして宇宙を統べるHEROが閃光の彼方より現れる。」

閃光から姿を現したのは、ネオスの面影を残しつつも白い髪を靡^{なび}かせて光の投擲^{ジャベリン}槍を携えた十代のHERO。

「2つの力が1つに重なるとき、はるか大宇宙の彼方から、光芒の戦士が舞い降りる！ コンタクト融合！ 閃光の光、《E・HEROグロー・ネオス》！！」

「これがコンタクト融合……だが十代くん、融合素材はどうなるのか教えてくれるかい？」

「ああ、融合素材はデッキに戻るんすよ」

「ほう……」

《E・HEROグロー・ネオス》

融合・効果モンスター

星7 / 光属性 / 戦士族 / 攻2500 / 守2000

「E・HEROネオス」+「N・グロー・モス」

自分フィールド上に存在する上記のカードをデッキに戻した場合のみ、融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードは必要としない）。

エンドフェイズ時にこのカードは融合デッキに戻る。

相手フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を破壊し、そのカードの種類によりこのカードは以下の効果を得る。この効果は1ターンに1度だけ自分のメインフェイズ1に使用することができる。

●モンスターカード：このターン、このカードは戦闘を行えない。

●魔法カード：このカードは相手プレイヤーに直接攻撃することができる。

●罠カード：このカードは守備表示になる。

「俺は召喚したグロー・ネオスのモンスター効果を発動。相手フィ

ールドに表側表示で存在するカードを破壊して、破壊したカードの種類によって効果を変化することができるぜ。《カードトレーダー》を破壊！ シグナルバスター ブルー・ライトニング！」

「くっ……！」

「プロデューサーさん、魔法カードを破壊した場合はどんな効果がある？」

「それはな春香、魔法カードを破壊した場合、グロー・ネオスは相手プレイヤーに直接攻撃できる効果を得るぜ！ 行け、グロー・ネオス。高木社長にダイレクトアタック！ ライトニング・ストライクー！」

十代の攻撃宣言。《E・HEROグロー・ネオス》が携えているジャベリンを高木に向けて投げる。グロー・ネオスの攻撃力は2500だ。よって高木が受ける戦闘ダメージは2500で、残りのライフは1500へダウンする。

「メイン2、俺は手札から装備魔法、《インスタント・ネオスピース》を発動してグロー・ネオスに装備してターンエンドだ」

《インスタント・ネオスピース》

装備魔法

「E・HEROネオス」を融合素材とする融合モンスターにのみ装備可能。

このカードを装備した融合モンスターは、エンドフェイズ時にデッキに戻る効果を発動しなくてもよい。

装備モンスターがフィールド上から離れた場合、自分の手札・デッキ・墓地から「E・HEROネオス」1体を特殊召喚することができる。

高木のターンが回ってくる。

彼の手札は2枚。ここまでエースモンスターである《古代の機械巨人》^{ゴレム}で十代を圧倒してきた。だが、ライフは逆転されて、手札も尽きようとしていた。だから高木はドロウするカードが逆転の1手であることを信じる。

そして……

「私のターン、ドロウだ。……！」

「おつ、何かいいカードが来たみたいだな、高木社長」

「うむ。きみを倒すカードがドロウできたよ。手札から今ドロウしたカード、《融合》^{アンティーク・ギアエンジン}を発動させてもらっ。《古代の機械巨人》と手札にある《古代の機械工兵》と《古代の機械巨竜》^{アンティーク・ギアガジェルドラゴン}の3体を融合だ！」

「その融合素材は……まさか!？」

「来い、私のエースモンスター！ 《古代の機械究極巨人》^{アンティーク・ギアアルティメット・ゴレム}を融合召喚だ！」

高木のフィールドの《古代の機械巨人》が2体のアンティーク・ギアモンスターと融合する。左腕には刺突武器が先端にある巨大なナックルシールドが装備され、下半身はケンタウロスのように変化する。右腕は特に変わらないが手甲がついていることが目視でわかる。

このカードと再び戦えるなんて……！

十代は、ケンタウロスのような下半身を持つ機械の巨人を見上げて笑う。

彼の恩師が自分の戸のデュエルで使った最強のアンティーク・ギアモンスター……《古代の機械究極巨人》。

^{アンティーク・ギアアルティメット・ゴレム}
《古代の機械究極巨人》

融合・効果モンスター

星10 / 地属性 / 機械族 / 攻4400 / 守3400

「古代の機械巨人」+「アンティーク・ギア」と名のついたモンスター×2

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが守備表示モンスターを攻撃したとき、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動することができない。

このカードが破壊された場合、自分の墓地に存在する「古代の機械巨人」1体を召喚条件を無視して特殊召喚することができる。

「これが社長の切り札……流石は大会優勝経験のある人だな」

「最近の環境じゃ《古代の機械巨竜》アンティーク・ギアガジェルドラゴンが出回ってるから見ないよね」

「でも攻撃力4400だし結構強いけどね」

「グロー・ネオスじゃ太刀打ちできないよ……」

響、亜美、真美、春香の順番で《古代の機械究極巨人》アンティーク・ギアアルティメット・ゴーレムに対する

評価を次々に言う。

相対している十代はニヤリと笑う。

こんな楽しいギリギリのデュエルは久しぶりだぜ！ という感情を抱いていた。

「行くぞ十代くん！ 《古代の機械究極巨人》で《E・HEROグロー・ネオス》に攻撃する。アルティメット・ストライク・パウンド……」

「くっ……うわああああっ……」

《古代の機械究極巨人》の拳で《E・HEROグロー・ネオス》が一撃で粉砕される。だが、このときを十代は待っていた。

フィールド上のこのカードの効果を使うトリガーが引かれたのだ

から。

「この瞬間、《インスタント・ネオスペース》の効果発動！ 装備モンスターがフィールドを離れたとき、自分の手札・デッキ・墓地からネオスを特殊召喚する。こい、《E・HEROネオス》！」
「だが、戦闘ダメージは受けてもらうよ」

十代のフィールドには彼のエースである《E・HEROネオス》が墓地から蘇生された。

だが、グロー・ネオスが破壊されたときの戦闘ダメージ、1900ポイントのダメージをライフに受ける。そして十代の残りライフは900へと一気に下がってしまう。

これで十代は一撃でもダメージを食らえば敗北寸前だ。

「私はターンエンドだ。さあ十代くん、きみのターンだ」
「ああ。こんな楽しいデュエルだ、こんな所で負けられねえ！ 俺のターン、ドロー！」

デッキトップからカードが引かれる。引いたカードを見て十代はすぐにデュエルディスクの魔法・罠のスロットに挿入する。

「マジック、《ホープ・オブ・フィフス》を発動！ 墓地から《E・HEROエアーマン》、《E・HEROプリズマー》、《E・HEROエッジマン》、《E・HEROフォレストマン》、《E・HEROグロー・ネオス》の5体をデッキ、エクストラデッキに戻して2枚ドロー！！」

十代は《ホープ・オブ・フィフス》の効果で選んだ5体のE・HEROをデッキに戻してシャッフルした後、カードを2枚ドローする。

ドローしたカードを左手に収めて、十代は手札から1枚のモンスターカードをディスクに読み込む。

「グロー・モスを召喚。そしてマジックカード、《ミラクル・コンタクト》を発動！ フィールドと墓地から融合素材モンスターをデッキに戻して、ネオスを融合素材とするE・HEROをエクストラデッキから特殊召喚する！ 俺はフィールドのネオスとグロー・モス、墓地の《N・ブラック・パンサー》を融合する。見せてやるぜ、コレがネオスの新たな姿だ！ 3つの力が1つに重なるとき、はるか彼方大宇宙に佇む光と闇を支配する。すべてを従え混沌の覇者となれ！ トリプルコンタクト融合！」

「トリプルコンタクト融合！？」

「す、凄い…… また新しい融合召喚方法だ」

「真美真美！ 今度は3体融合だよ！」

「うんうん！ なーに出てくるのかな？」

「さあ、こい十代くん！」

「現れる、《E・HEROカオス・ネオス》！！」

ミラクル・コンタクトの効果でフィールドのネオス、グロー・モス、墓地のブラック・パンサーが融合する。

灰色の閃光から、銀色の悪魔の翼を有し、どこかネオスの面影を残す胸のクリスタルと容姿を持つ混沌の戦士が十代の前に降り立つ。

《ミラクル・コンタクト》（アニメ、TFオリカ）

通常魔法

自分のフィールド上・墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターをデッキに戻し、「E・HEROネオス」を融合素材とする「E・HERO」と名のついた融合モンスター1体を召喚条件を無視してエクストラデッキから特殊召喚する。

《E・HEROカオス・ネオス》

融合・効果モンスター

星9/闇属性/戦士族/攻3000/守2500

「E・HEROネオス」+「N・ブラック・パンサー」+「N・グロウ・モス」

自分フィールド上に存在する上記のカードをデッキに戻した場合のみ、エクストラデッキから特殊償還が可能（「融合」魔法カードは必要としない）。

エンドフェイズ時にこのカードをエクストラデッキに戻し、フィールド上に存在する全ての表側表示モンスターをセットした状態にする。

コイントスを3回行い、表が出た回数によって以下の処理を行う。
この効果は1ターンに1度だけ自分のメインフェイズ1に使用することができる。

- 3回：相手フィールド上に存在する全てのモンスターを破壊する。
- 2回：このターン相手フィールド上に表側表示で存在する効果モンスターは全て効果が無効化される。

- 1回：自分フィールド上に存在する全てのモンスターを持ち主の手札に戻す。

「そして俺は手札からフィールド魔法、《ネオスペース》を発動する！ 《ネオスペース》の効果で《E・HEROネオス》及びネオスを融合素材とする融合モンスターの攻撃力は500ポイントアップするぜ！」

《ネオスペース》

フィールド魔法

「E・HEROネオス」及び「E・HEROネオス」を融合素材とする融合モンスターの攻撃力を500ポイントアップする。

「E・HEROネオス」を融合素材とする融合モンスターは、エン

ドフェイズ時にデッキに戻る効果を発動しなくてもよい。

十代はデュエルディスクの専用スロットに《ネオスペース》のカードを挿入する。それと同時に周りの景色が一変する。
幻想的な虹色のフィールドが周りを支配する。

同時にカオス・ネオスの攻撃力が3500ポイントに上昇する。

「そしてカオス・ネオスのモンスター効果発動！ 1ターンに1度、メインフェイズ1にコイントスを3回行って、表が出た回数によって異なる効果を得るぜ！」

「ギャンブルの効果！？」

「運次第では俺のフィールドがから空きになる。けど今はコレに賭ける。コイントス！」

ソリッド・ヴィジョンで映し出された3つのコインが一斉に中を舞い、地面に落ちる。

1つ目は表。

2つ目も表。

3つ目は……。

「よっしゃ、全部表だ！ カオス・ネオスの効果で相手フィールド上に存在する全てのモンスターを破壊だ！」

「くっ、《古代の機械究極巨人》が破壊されたか……だが、破壊された《古代の機械究極巨人》の効果で墓地から《古代の機械巨人》を召喚条件を無視して特殊召喚させてもらう！」

墓地から《古代の機械巨人》が蘇生される。

だが攻撃力はカオス・ネオスよりも低い3000だ。それに高木の手札や伏せカードは1枚も無い。十代はこのターンで勝てるかもしれない、そう思った。

「行くぜ！ 《E・HEROカオス・ネオス》で《古代の機械巨人》に攻撃する！ ライト・アンド・ダークスパイラル！！」
「くうっ……」

カオス・ネオスから発せられる白と黒の光線。それが《古代の機械巨人》を飲み込んで、破壊する。

そして戦闘ダメージを受けた高木のライフは残り1000となる。

「手札から速攻魔法、《コンタクト・アウト》を発動！ カオス・ネオスの融合を解除してデッキから融合素材モンスター1組を特殊召喚する。戻って来い、ブラック・パンサー、グロー・モス、ネオス！」

《コンタクト・アウト》

速攻魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する「ネオス」と名のついた融合モンスター1体を融合デッキに戻す。

さらに、融合デッキに戻したモンスターに記された融合素材モンスター1組が自分のデッキに揃っていれば、この1組を自分フィールド上に特殊召喚することができる。

十代が発動した《コンタクト・アウト》により、カオス・ネオスがフィールドから姿を消した後にその融合素材であるネオス、グロー・モス、ブラック・パンサーが入れ替わりでフィールドに現れる。ここで十代がブラック・パンサーかネオスで高木にダイレクトアタックを行えば十代の勝利だ。

それに、高木のフィールドと手札は1枚もカードが存在しない。

「高木社長、俺の勝ちだ！ ネオスでダイレクトアタック！ ラス・

オブ・ネオス!!」

十代の攻撃宣言。それと同時にネオスが高木に最後の一撃を喰らわせる。

高木のデュエルディスクが彼のライフの数値を1000から0に変化させる。よってこのデュエルは十代の勝利だ。

ソリッド・ヴィジョンで映し出されていたネオスたちが消える。

デュエルが終わり十代は高木に近づいて、

「ガツチャ！ 最高のデュエルだったぜ、高木社長！」

「私も久しぶりにデュエルを楽しめたよ。十代くん、またお相手頼めるかな？」

「おう！ デュエルならいつでも大歓迎だぜ！」

2人の右腕が交差し、握手を交わす。

十代と高木によるデュエルが終わり数時間後、765プロの事務所に所属アイドル全員が戻ってきた。

彼女らが今話していることは1つ。

高木社長にデュエルで勝利したらしい新しく入社したプロデューサーのことだ。

2人のデュエルを見ていた春香、響、亜美、真美の4人が話して、765プロ内でどんどん噂が広がっていったのだ。

1人は見たことの無いカードを使ったと聞いているプロデューサーに興味を示す者。

1人は新しく入ってきたプロデューサーが有能か疑問に思う者。アイドルたちの間でさまざまな考えが次々と浮かんできては消えていく。

そして午後6時が過ぎて、社長である高木が事務所の全員を1番広いフロアに集めた。

「えー、みんなも知っていると思うが、我が765プロに新しく入ってきたプロデューサーを紹介したいと思う。じゃあ、よろしく頼むよ」

「わかりました。……俺は遊城十代。これからプロデューサーとして、皆と一緒に進んで行こうと思う。これからよろしくな！」

屈託の無い笑顔で十代はアイドルたちに自己紹介をする。

十代の笑顔を見てアイドルたちは全員彼に見惚れて顔を真っ赤にするが、それは全くの余談である。

TURN・3…究極の機械巨人VS混沌の覇者（後書き）

最後のほうグダグダでしたね。……すいませんでした。

今回の社長のデッキですが、俺が作った社長のデッキレシピには入ってません。グロー・ネオスの効果を使うために急遽出しました。

あと、感想の制限を解除しました。なのでユーザ登録していない皆さんも気軽に感想を送ってください。荒らしや指摘だけなどはすぐに削除します。

それと、今回登場したオリカ、《等価交換》はどうだったでしょうか？ 評価お願いします。

……961プロ側に木星とヨハン出そうかな？

TURN・4…初レッスンSt@rt! 前編(前書き)

どうも、昨日アニマス20話を見て、遊戯王GX3期オープニング「ティアドロップ」を聞いてマジ泣きました、キラーです。

いやだって、アニマスのほうは千早の心情とかすごく良く描かれてて、もう最後のライブのシーンでは……(大泣き)

で、ティアドロップのほうは登場予定の霸王十代の性格とかを調べてるうちに行き着いた某遊戯王サイトでティアドロップの評価を見て「十代の心情が良く描かれている」などの感想を見て十代の気持ちを考えてみるとマジで泣いてしまいました。

さて、話を変えましょう。

最近の小説執筆中にはアニマス13話で流れた美希の持ち歌、「マリオネットの心」と竜宮小町以外のオールアイドルで歌った「自分REST@RT」を聞きながら執筆しています。他の曲も好きですが、最近この2曲と「ティアドロップ」にハマってます。

結論↓皆さんも是非聞いてみてください！

ちなみに今回の話、長くなるのでデュエルシーンの途中で終了させています。次回は現在執筆中なのでお待ちください。

というわけで(どついうわけだ)、最新話どうぞ！

パソコンのキーボードを叩く音が何度も聞こえる。

遊城十代は、765プロの事務所です仕事をしていた。と言っても、本業であるプロデューサーの仕事ではなく事務関係の仕事だが。

資料に目を通しながら十代は使い慣れているかのようにキーボードを軽く何度も叩くが、

（くっそー！！ 事務関係の仕事待ったくわからねえ！ 初日からこんなのでアリかよッ！？）

――かなり、超をつけるほど苦戦していた。

ちなみに昨夜は高木社長の厚意で事務所に寝泊りさせてもらった。一応適当な物件を紹介してくれるらしい。

最後の資料にざっと目を通した十代はエンターキーを押して、事務イスに寄りかかる。ようやく自分に割り当てられた仕事が終わったのだ。

もう時間は午後0時を過ぎている。周りを見ていれば既に昼食を食べているアイドルたちや休憩に入っている事務員の小鳥とアイドル兼プロデューサー兼事務員の律子も事務机から離れている。

十代は一息つくと、コンビニのレジ袋から取り出したカップラーメンを持ち出して給湯室に向かう。

（ようやく午前の仕事が終わった……。案外早く終わった感じがするな）

『集中してやってたからでしょ。私が少し休憩したら？ って言っても無視したしね』

（ははっ……悪いなユベル）

背後で姿を現したユベルに謝りながら十代はカップラーメンにお湯を注ぐ。

この後の予定は1時半からダンスレッスン、ダンスレッスンが終わればレッススタジオ内の部屋を移動してデュエルレッスンを行う。

ちなみにデュエルレッスンとは、その名のとおりである。十代の世界で言う、デュエル・アカデミアのレッスン版である（わかりづらくて本当にごめんなさい……）。

自分の席に戻って十代はカップラーメンの蓋を開ける。割り箸で麺を掴み取り一気に口に入れる。

食事をしながら十代は今日レッスンを行うメンバーの確認をする。メンバーは春香、真、真美の3人。

（プロデューサーとしては初めての仕事だし……頑張るか。行く前にはちゃんとレッスン内容とかを確認しとかなきゃな）

カップラーメンを啜りながら十代は資料を読む。

と、そこへ誰かがやってきた。

「ねえねえ兄ちゃん」

「ん？ どうした真美？」

「今日のデュエルレッスン何するの？ 真美、昨日デッキ調整終わったから早くデュエルしたいんだよね」

「ナイシヨナイシヨ。始まってからのお楽しみだ」

「ぶー。兄ちゃんのケチ」

顔を膨らませながら真美は十代の机にある《E・HEROネオス》を見る。

その後、春香や真も十代のところにやってきて、昼休みは食事よりも3人との話に夢中になっていた十代だった。

で、都内某所のレッスンスタジオに向かっている。

十代はワンボックスカーを運転しながら指定されたレッスンスタジオに車を走らせる。いつ十代が免許取ったの？　ということは絶対に言っちゃいけない。アニメでもバイク運転していたしね。

助手席にいる真と後ろの席にいる真美、春香はデュエルの話をしていて。そこに十代も時々混ざっていて、車内は盛り上がっていた。

「で、手札を捨てさせればハンドレス完成。一気にインフェルニティモンスターで一斉攻撃だよ！」

「うーん、それじゃ真美の【暗黒界】はまこちんの【インフェルニティ】と相性悪いな……最近じゃあ新しいストラクに暗黒界出ると言ってるけど絶対戦士族強化されるよねー」

「戦士族と言うより閻属性だと思うな。閻属性は確定だってネットに書いてあつたしね」

「へえ、今度のストラクチャー閻属性メインか」

「ネットではそう書いてありました」

「今からどんなカードが出るのかワクワクするぜ！　それにしても意外だな。真と真美が閻属性デッキ使うなんてさ。真美はどんなカードでも使いそうだけどさ、真は戦士族あたりだと思ったな」

「兄ちゃん今失礼なこと言わなかった？」

「気にするな」

ジト目で十代を見る真美、だが十代はそれをスルー。

「前はそうだったんですけど、アニメ見て、とあるキャラクターに

憧れちゃって、それで【インフェルニティ】に変えたんです！」

「インフェルニティ、ね……どんなカードなんだ？ 俺最近までデュエルモンスターズやってなかったからさ」

ウソだ。

だが、今の十代は嘘をつくしかない。自分の住んでいた平行世界には「インフェルニティ」というカテゴリは無い。

昨夜十代はパソコンでカードリストを見てみたが、明らかにシンクロ召喚が広まり始めた十代の世界とはまるつきり違い、「デックジーナス」や「インヴェルズ」、千早が使っていると聞いた「リチュア」というカテゴリが増えていて、新たに「エクシーズ召喚」と呼ばれる召喚方法が公開されているからだ。今月の16日にはエクシーズモンスターが封入された最新パックが発売される。

いくら本当のことを話したとしても、信じてもらえるはずがない。だから十代はウソを突き通すことを決めた。

だが、どんなカードか気になるのは決してウソではなかった。

「インフェルニティは手札が0枚のときに効果を発揮するカードなんです。だからサポートカードは手札を墓地に送る効果を持つてるのが多いんですよ」

「手札が0枚か……インフェルニティは手札が少ない代わりに墓地で発動する効果のカードが多いんだな」

「そこまでわかるんですか？」

「まあな。手札が無いなら墓地で発動する効果多いのかつて」

「兄ちゃん推理力あるね」 探偵になれるんじゃない？」

「プロデューサーが探偵……ちょっと似合わないかも」

「ま、真！ 本当のこととはいえ言っちゃダメだよ！」

「……だったら堂々と言うなよお前らツツ！」

今日も765プロは平和だった。車内だが。

都内のあるレッスンスタジオ。

そのこの1室で靴を床に叩きつける音が何度も響く。春香、真、真美がダンスステップの練習をしているからだ。

十代は手を叩いてリズムを取る。

とは言っても、十代はわからないところをユベルにサポートしてもらっているのだからだけだ。

丁度3人のダンスが終わり、十代は終了の合図を告げる。

「よし、そこまでな。時間は少し余ってるから10分くらい休憩したら部屋を移動するからな」

「……はい」

十代は壁に備えられている時計を見る。時間は4時前。スケジュールどおり、このまま進めば4時丁度にはデュエルレッスンを始められるだろう。

（さて、俺はデッキの調整でもしてるか）

持ってきた荷物の中から十代は自分のデッキおよびエクストラデッキを取り、中身を確認する。

《E・HEROネオス》、《N・フレア・スカラベ》、《ネクロ・ガードナー》、《E・HEROフレイム・ウィングマン》……これまで十代と一緒に戦い抜いてきたカードたち。そのデッキの中には十代の精霊である《ユベル》や《ハネクリボー》が入っている。

それにしてもどうして最近ハネクリボーは出てこないんだ——？

ふと疑問に思う十代。そんなときに春香から話しかけられた。

「プロデューサーさん、どうしました？」

「あ、いや、なんでもねえ。それより春香こそどうしたんだ？」

「えっと、時間があるからプロデューサーさんに質問でもしようかなって。ほら、まだ初日だしプロデューサーさんのことよく知らないですから……」

「それもそうだな……よしっ、なんでも質問して来い！」

十代はオシリス・レッドの制服を揺らしながら答える。そのときに浮かべた笑顔は春香が見惚れるほどだった。

一瞬だけ顔を真っ赤にしてすぐに意識を切り替えると、春香は口を開いて十代に質問しようとする。

そのとき――

「じゃあ、プロデューサーってライバルとかっていますか？」

「ちょ、真！？ 私が先に質問しようと思ってたのに！」

「いいじゃんいいじゃん。ボクも何か質問しようかなって思ってたしね。プロデューサー、どうなんですか？」

「兄ちゃん、早く教えてよ」

真美まで食いついてきた。

とりあえず十代はデッキを置いて、質問に答えることにした。

「ライバルか……結構いるんだよな。アームド・ドラゴンやユニオン使いの万丈目に儀式モンスターメインの明日香、ロイドとサイバーを組み合わせた機械デッキの翔、純正サイバーを使うカイザー、恐竜族デッキの剣山、D・HEROを操るエド、ヴォルカニクデッキのオブライエン、化石融合っていう珍しいカードを使ってるジム。もっとたくさん俺のライバルはいる。けど、その中でも1番は

……」

一息ついて、再び十代は台詞を紡ぐ。

自分の、最高の親友との思い出を思い出しながら。

「宝玉獣デッキを使ってる……ヨハン。ヨハン・アンデルセンだな。方向音痴だけどポジティブなヤツでさ、俺とデュエルしたときには五分五分の実力で、バトルロイヤルルールでデュエルしたときも俺と一緒に力を合わせて相手を倒したスゲエいいヤツなんだ!!」

「それじゃあ、兄ちゃんって憧れの人とかっている？」

「もちろん！俺の憧れの人……武藤遊戯さんっていうんだ。俺がアカデミアを卒業するときにデュエルした最高のデュエリストなんだぜ!!」

十代は3人に自分の世界の初代デュエルチャンピオン、武藤遊戯の自慢をする。流石に「遊戯さんには3000年前に古代エジプトを統一していた名も無きファラオの魂が宿ってるんだ!!」なんて信じてもらえないようなことは口に出さなかったが。

「プロデューサーさん、その遊戯さんってどんなデュエリストなんですか？」

「遊戯さんはどんなときでもデュエルを楽しんで、自分のデッキを思うが俥に使いこなすんだ！俺の周りでは史上最強のデュエリストって呼ばれてたんだぜ！」

「じゃあその遊戯兄ちゃんはどうなデッキ使うの？」

「遊戯さんのデッキ、ボクも聞いてみたいです。教えてください、プロデューサー」

「そうあわてんなって。……遊戯さんのデッキは、『ブラック・マジシャン』を主力に『ブラック・マジシャン・ガール』や『バスター・ブレイダー』、『幻獣王ガゼル』、『クリボー』、実際に見た

ことは無いけど絵札の三銃士を使うんだ。魔法・罫は《聖なるバリ
ア・ミラーフォース》、《魔法の筒》^{マジック・シリンダー}、あとは《デイメンション・
マジック》だな」

「……コンセプトがめっちゃくちゃですね」

「確かに」

「……お前らそれを言うなよ。でも、遊戯さんのデュエルタクティクスはハンパじゃねえ。遊戯さんとデュエルしたけど、コテンパンにされたしな。あーっ、今思い出したらもう1度遊戯さんとデュエルしたくなってきたー!!」

「そんなに強いんですね、遊戯さん」

「ああ。俺の憧れる最強のデュエリストだからな」

遊戯の話をして十代から聞いて、春香はどんな人だろうか？ と興味を持ち、真美と真は「「ボクも（真美も）デュエルしてみたいな」と対戦を望んでいた。

3人の感想をそれぞれ聞きながら、十代は遊戯とのデュエルを思い出していた。ネオスとブラック・マジシャンがぶつかり合い、《ネオスペース》が支配する幻想的な空間で最高に楽しかったデュエルを。最後には幻のレアカードとも呼ばれる3幻神の1体、《オシリスの天空竜》と戦って……再び遊戯との再開、そして再戦を願っていた。

十代はそろそろ休憩時間も終わりだな、と時計を見ながら思い、

「それよりも、もうデュエルレスン始めるぜ。ほら、デュエルデイスクとデッキ持ってきて行くぞ」

「……はい」

急かすように十代は3人に声をかける。

それに突き動かされるように春香、真、真美もすぐに必要な荷物だけを持って部屋を移動する。

「よし、そんじゃまずは……春香と真でデュエルしてくれ」

「え？ どうしてですか？」

「俺はまだ皆の実力を見せてもらってないからどこをどうすればいい、なんて言えないしさ」

「それもそうだね。でも兄ちゃん、真美の対戦相手はどうすんのさ？」

「春香と真、どっちか勝ったほうとな」

はい、と真美が笑顔で返事をする。それと同時に春香と真が場所を移動して距離を置く。ある程度離れると2人は腕にデュエルディスクをつけて、シャッフルし終えたデッキをセットする。

先攻後攻はジャンケンで決めることになり、真が勝利する。

デュエルする準備が終わって、2人はデッキからカードを5枚ドロ―する。

「いくよ真」

「うん。ボクも負けないからね」

それだけ言う。

後は言葉など必要ない。

「デュエル！！」

開始宣言。

先攻である真がデッキトップに指を置き、カードを1枚ドロースする。

「ボクのターン、ドロ―！ まずは《おろかな埋葬》を発動してデッキから墓地に《インフェルニティ・リベンジャ―》を送るよ。続けて《インフェルニティ・ネクロマンサー》を攻撃表示で召喚！ さらに《インフェルニティ・ネクロマンサー》は召喚成功時、守備表示になるよ」

真のフィールドに紺色に似た黒のローブを身に纏い、ローブから骨のような両手を覗かせている悪魔が召喚される。その悪魔は自信の効果によって守備の体制をとる。

《インフェルニティ・ネクロマンサー》

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻0 / 守2000

このカードは召喚に成功したとき、守備表示になる。

自分の手札が0枚のとき、以下の効果を得る。

1ターンに1度、自分の墓地に存在する「インフェルニティ・ネクロマンサー」以外の「インフェルニティ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚することができる。

「ボクはカードを2枚伏せてターンを終了するよ」

「私のターンだね、ドロ―。私も《おろかな埋葬》を発動して墓地に《レベル・ステイラー》を送るね」

そう言つて春香は、デッキをディスクから外して《レベル・ステイラー》1枚を墓地ゾーンに送る。

続けて春香は自分の手札を見て、

「手札のモンスター、《グローアップ・バルブ》を墓地に送って《クイック・シンクロン》を特殊召喚するよ！ さらに2体目の《レベル・ステイラー》召喚！」

《クイック・シンクロン》

チューナー・効果モンスター

星5/風属性/機械族/攻700/守1400

このカードは手札のモンスター1体を墓地へ送り、手札から特殊召喚することができる。

このカードは「シンクロン」と名のついたチューナーの代わりにシンクロ素材とすることができる。

このカードをシンクロ素材とする場合、「シンクロン」と名のついたチューナーをシンクロ素材とするモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

《レベル・ステイラー》

効果モンスター

星1/闇属性/機械族/攻600/守0

このカードが墓地に存在する場合、自分フィールド上に表側表示で存在するレベル5以上のモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターのレベルを1つ下げ、このカードを墓地から特殊召喚する。

このカードはアドバンス召喚以外のためにはリリースできない。

「私はレベル1の《レベル・ステイラー》にレベル5の《クイック・シンクロン》をチューニング！ 集いし力が、大地を貫く槍となる。光さす道となれ！ シンクロ召喚！ 砕いて、《ドリル・ウオリアー》――！」

クイック・シンクロンがチューナーモンスターの描かれたルーレ

ツトの内、《ドリル・シンクロン》の絵を撃ち抜き、緑色の5つの輪になる。その輪は《レベル・ステイラー》を囲み、次の瞬間にはその輪の中で光が放出される。

5つの輪が消えると、ベージュ色のマフラーをつけて、右腕にドリルを有する茶色い戦士、《ドリル・ウォリアー》が春香のフィールドに現れる。

《ドリル・ウォリアー》

シンクロ・効果モンスター

星6 / 地属性 / 戦士族 / 攻2400 / 守2000

「ドリル・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上1ターンに1度、自分のメインフェイズ時にこのカードの攻撃力を半分にし、このターンこのカードは相手プレイヤーに直接攻撃することができる。

また、自分のメインフェイズ時に1度だけ、手札を1枚捨ててこのカードをゲームから除外することができる。次の自分のスタンバイフェイズ時、このカードの効果で除外したこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。その後、自分の墓地に存在するモンスター1体を手札に加える。

「バトル！ 《ドリル・ウォリアー》で《インフェルニティ・ネクロマンサー》に攻撃だよ。ドリル・ランサー！！」

「その攻撃は通させないよ。カウンター罠《攻撃の無力化》発動！これで攻撃を無効にしてバトルフェイズを強制終了させるよ！」

「あうう……残念」

《攻撃の無力化》

カウンター罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動することができる。相手モンスター1体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「私はカードを1枚伏せてターンエンド」

「あ、エンドフェイズ時に罠^{トラップ}発動。《インフェルニティ・インフェルノ》！ 手札を2枚まで捨てることで、自分のデッキからインフェルニティモンスター2体まで墓地に送るよ！」

《インフェルニティ・インフェルノ》

通常罠

自分の手札を2枚まで捨て、捨てた枚数分だけ自分のデッキから「インフェルニティ」と名のついたカードを墓地へ送る。

真は手札を2枚捨てて、デッキから《インフェルニティ・デストロイヤー》、《インフェルニティ・デーモン》の2体を墓地へ送る。

「ボクのターン、ドロ！ メインフェイズ時、永續罠の《ハンドレス・フェイク》を発動するよ。この効果で次のボクのターンのスタンバイフェイズまでボクの手札をすべて除外するよ」

「ってことは……真の手札は0！？」

「そういうこと。でもその前に《インフェルニティ・ビートル》を通常召喚。……これでハンドレスコンボが可能になった！ 《インフェルニティ・ネクロマンサー》の効果発動！ 墓地から《インフェルニティ・デストロイヤー》を蘇生！！」

《インフェルニティ・ビートル》

チューナー・効果モンスター

星2/闇属性/昆虫族/攻1200/守0

自分の手札が0枚の場合、このカードをリリースすることで自分のデッキから「インフェルニティ・ビートル」を2体まで特殊召喚する。

《ハンドレス・フェイク》

永続罫

自分フィールド上に「インフェルニティ」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、１ターンに１度だけ、次の自分のスタンバイフェイズ時まで自分の手札を全て裏側表示でゲームから除外することができる。

《インフェルニティ・デストロイヤー》

効果モンスター

星６ / 闇属性 / 悪魔族 / 攻２３００ / 守１０００

自分の手札が０枚の場合、このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送ったとき、相手ライフに１６００ポイントダメージを与える。

フィールドには３体のインフェルニティ。このターン、真がチューナーモンスターを通常召喚したため更なる展開が可能になる。それに手札は０枚。「インフェルニティ」デッキには最高の状態だ。と、十代とユベルが思っていると、真がゲームを続ける。

「さらにボクはレベル６の《インフェルニティ・デストロイヤー》にレベル２の《インフェルニティ・ビートル》をチューニング！」
「６＋２……レベル８のシンクロ召喚か！」

「正解ですプロデューサー。……地獄と煉獄がゼロへと鎖するとき、無間の定めより死神は蘇る！ 舞い降りろ闇よ！ シンクロ召喚！ その目に映るのは生か死か？ いでよ、《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》――！」

《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星８ / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻３０００ / 守２５００

闇属性チューナー+チューナー以外の悪魔族モンスター1体以上1ターンに1度、自分の墓地に存在するレベル6以下の闇属性の効果モンスター1体をゲームから除外して発動することができる。このカードはこのターンのエンドフェイズ時まで、この効果を発動するためにゲームから除外した効果モンスターと同名カードとして扱い、同じ効果を得る。

また、このカードが破壊され墓地へ送られたとき、自分のデッキから「地縛神」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

先ほど《ドリル・ウォリアー》がシンクロ召喚されたときと同じエフェクトが室内に展開される。《インフェルニティ・ビートル》から出現した2つの輪が《インフェルニティ・デストロイヤー》を覆う。

6つの星が光り輝き閃光をを放つ。

光が消えると、十代が最初に目にしたのは吸い込まれそうなほど美しい漆黒の瞳。

その後、《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》の全身が見える。顔の中心にある漆黒の瞳と同じものが全身に存在している。おそらく、名前の『ワンハンドレッド』とは無数にある全身の瞳を指しているのだろつ。

そして、禍禍しい翼を羽ばたかせて真を守るようにフィールドに降る。

「《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》の効果はこのまま使わないでバトルフェイズ！ 行け、ワンハンドレッド・アイ！ 《ドリル・ウォリアー》に攻撃。インフィニティ・サイト・ストリーム！」

「え……きゃあああつ！」

真の攻撃宣言と同時に《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》の

瞳が妖しく輝くと、右腕のドリルを構える《ドリル・ウォリアー》に向かつて漆黒のブレスを放つ。飲み込まれた《ドリル・ウォリアー》はすぐさま破壊される。

《ドリル・ウォリアー》が戦闘によって破壊されたことで春香のライフに600ポイントの戦闘ダメージが与えられ、残りのライフは3400となる。

「これでボクはターンエンド」

真からエンド宣言が言い渡されて、春香のドローフエイズとなる。今の光景を見ていた十代は、半透明だがモンスターの姿を現しているユベルとデュエルタクティクスの話をする。

「（ユベル、2人のタクティクス、どう思う？）」

「私は、そうね……2人に対しての評価はあなたよりも下ね。あなたの場合は天性から仕方ないけど。真は手札ゼロで効果を発揮するインフェルニティをうまく扱えているわね。ま、3ターン目だからちゃんとした判断は下せないわ」

「（俺と同じか。んじゃあ春香のほうはどうだ？俺としては過去で遊戯さんや遊星と一緒に戦ったときの遊星の戦術に似てる、けどちょっと正確さが足りないかなって思ってる）」

「結構春香に対しての評価は高いのね。嫉妬しちゃうわ……」

「（そんなこと言っていないでお前の評価を聞かせてくれよ）」

「あら、つれないわね。……まだ1ターンしか見てないからわからないわね。デュエルが終わってからでいい？」

「（おう、わかった。そんじゃ、引き続きデュエルを見てようぜ）」
「そうね」

ユベルとの会話で、十代は2人の戦術の改善点をデュエルを見続けながら考える。

真剣に改善点を考えていると、

「兄ちゃんどうしたの？ 難しそうな顔しちゃって」

「……っと、真美、いきなり抱きつくなよ。そういうことは好きなヤツにでもしなさい」

「えー？ 真美、兄ちゃんのこと好きだよ？ 昨日だって亜美と一緒に話してくれたじゃん」

「……………」

あーもうそうじゃなくて！！ と十代は心の中で叫ぶが、ユベルはやれやれといった表情で呆れている。

とにかく真美にデュエルを見なさい、と言った十代は表情を緩めて視線を変える。

その視線の先にはデッキからカードを1枚ドロースする春香が映った。

「（春香、真、楽しくてワクワクするようなデュエル、見せてくれないな！！）」

TURN・4…初レッスンStart! 前編(後書き)

うーん、みんなの口調が難しい。それに十代の活発さももうちょっとうまく表現したい……。

それで、今回の話は楽しめたでしょうか？ 今回は十代の765プロジェクトの活動初日ですが…… 自分的にはもうちょい改善したほうがいいかな？ と思っています。

さて、そろそろユベルを表舞台に出すか…… (黒笑)

それでは感想、誤字脱字報告待っています！

TURN・4…初レッスンSt@rt! 後編(前書き)

どうも、キラーです。思ったより早く完成したので更新します。

ちなみに今回のデュエルは「あまり回らなかった場合」を想定してデュエル構成をしているので、その辺はご了承ください。

で、皆さんも気になっていると思います春香のデッキは……後書きで公開します。ただし、春香のデッキは【シンクロン】デッキじゃありませんよ。ですが、似たようなデッキを使っています。

それではどうぞ！

「私のターン、ドロー!」

春香のターンが回ってくる。フィールドはがら空きだが、手札はまだある。このターンが勝負どころだろう。

「私は魔法カード、《リバイヴドロー》を発動! ドローする効果か手札からモンスターを手札に加える効果のどちらかを選択して発動するよ。もちろん私はドロー効果を選択! カードを2枚ドローした後、手札を1枚墓地へ送るね」

《リバイヴドロー》(「ブレイヴ使いの転生者」登場予定のオリカ)通常魔法

「リバイヴドロー」は1ターンに1度しか発動することができない。次の効果から1つを選択して発動する。

- 自分の墓地からモンスター1体を選択し、手札に加える。手札に加えたモンスターカードはこのターン使用することができず、召喚・反転召喚・特殊召喚された場合、効果は無効となる。
- デッキからカードを2枚ドローし、その後自分の手札を1枚墓地へ送る。

春香はデッキからカードをドローして、手札を墓地ゾーンに送る。その後、手札のカードを1枚手に取ってすぐにデュエルディスクに読み込む。

「いくよ真! 《ジャンク・シンクロン》を攻撃表示で召喚。さらに召喚に成功したとき、墓地からレベル2以下のモンスターを守備表示で特殊召喚するね。私はこの効果で《チューニング・サポータ

―』を特殊召喚!」

「え、《チューニング・サポーター》!? いつの間に墓地に……?」

「さっきの《リバイヴドロー》で墓地に送ったんだよ」

春香は真に《チューニング・サポーター》を墓地に送った経緯を説明する。その間にも、帽子を被ったロボットのようなモンスター、《ジャンク・シンクロン》が現れてお鍋を被った《チューニング・サポーター》を蘇生させる。

《ジャンク・シンクロン》

チューナー・効果モンスター

星3 / 闇属性 / 戦士族 / 攻1300 / 守500

このカードが召喚に成功したとき、自分の墓地に存在するレベル2以下のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚することができる。この効果で特殊召喚されたモンスターの効果は無効化される。

《チューニング・サポーター》

効果モンスター

星1 / 光属性 / 機械族 / 攻100 / 守300

このカードをシンクロ素材に使用する場合、このカードはレベル2モンスターとして扱うことができる。

このカードがシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、自分はデッキからカードを1枚ドローする。

さらに春香はデュエルディスクの魔法・罫スロットにカードを1枚挿入する。

「続けて《チューニング・サポーター》を対象に魔法、《機械複製術》を発動! 対象になった《チューニング・サポーター》をデッ

キから2体を守備表示で特殊召喚するよ！ 来て、《チューニング・サポーター》たち！」

「モンスターを大量展開……シンクロ召喚だね。どんなのが出てくるか楽しみだな」

「じゃあ見せてあげるよ。私はレベル1とレベル2となっている3体の《チューニング・サポーター》にレベル3の《ジャンク・シンクロン》をチューニング！ 集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光さす道となれ！ シンクロ召喚！ 粉碎して、《ジャンク・デストロイヤー》！！」

《機械複製術》

通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する攻撃力500以下の機械族モンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターと同名モンスターを2体まで自分のデッキから特殊召喚する。

《ジャンク・デストロイヤー》

シンクロ・効果モンスター

星8/地属性/戦士族/攻2600/守2500

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上このカードがシンクロ召喚に成功したとき、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上に存在するカードを選択して破壊することができる。

「《ジャンク・デストロイヤー》の効果発動！ このカードのチューナー以外のシンクロ素材の数だけフィールド上のカードを破壊する！ 私は伏せカード1枚と《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》、《インフェルニティ・ネクロマンサー》を破壊。タイダル・エナジー！ さらにシンクロ素材になった《チューニング・サポーター》の効果でデッキからカードを3枚ドロー！」

「嘘！？ カード除去に手札増強まで！？ このコンボ前にもやっていたなかった春香？」

「結構使いやすいからね。とにかく、《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》たちは破壊だよ！」

シンクロ召喚された《ジャンク・デストロイヤー》の効果により、真のフィールドに存在する伏せカード1枚、《インフェルニティ・ネクロマンサー》、《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》が破壊される。ちなみに伏せカードはおそらくブラフとして伏せられていただろう《ZERO-MAX》だ。

それを見て十代とユベルは内心、うまい！ と春香を評価していた。

《チューニング・サポーター》を《機械複製術》で大量展開して、《ジャンク・デストロイヤー》のシンクロ素材にして大量ドロー+複数のカード除去を行うこのコンボはかなり強烈だろう。

それに、真のエースモンスターである《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》をも破壊したのだから精神的ダメージも多いだろう。

続けて春香はバトルフェイズに入る。

「行くよ！ 《ジャンク・デストロイヤー》でプレイヤーにダイレクトアタック。デストロイ・ナックル！」

「くっ……2600のダメージは結構キツいな……」

直接攻撃がとおり、真のライフポイントが4000から1400へと大幅にダウンする。次のターンで何かしら対処しなければ真の敗北は確実だろう。

「私は墓地の《レベル・スティーラー》の効果で自身を蘇生。だから《ジャンク・デストロイヤー》のレベルが7になるよ。そしてカードを1枚伏せてターンエンドだよ」

「それじゃあボクのターンだね。……ドロー！　そしてスタンバイフェイズ時、《ハンドレス・フェイク》の効果で除外されていた手札が戻ってくる！」

真はデッキからカードをドローして、さらに《ハンドレス・フェイク》によって除外していた手札を全て戻す。

「永続魔法、《インフェルニティガン》を発動！　このまま効果を発動してインフェルニティと名のついたモンスター、《インフェルニティ・ミラーージュ》を墓地に送るよ」

《インフェルニティガン》

永続魔法

1ターンに1度、手札から「インフェルニティ」と名のついたモンスター1体を墓地へ送ることができる。

また、自分の手札が0枚の場合、フィールド上に存在するこのカードを墓地へ送ることで、自分の墓地に存在する「インフェルニティ」と名のついたモンスターを2体まで選択して自分フィールド上に特殊召喚する。

この後、《ハンドレス・フェイク》の効果を使い、真は手札を再び0枚にする。

さらに真は、発動したばかりの《インフェルニティガン》を魔法・罫スロットから抜いて、墓地ゾーンへ送る。どうやら《インフェルニティガン》の効果を発動するようだ。

「《インフェルニティガン》の効果を発動！　このカードを墓地へ送ることによって、墓地から2体のインフェルニティモンスター、《インフェルニティ・ネクロマンサー》と《インフェルニティ・デーモン》を特殊召喚！　さらに《インフェルニティ・デーモン》の

効果発動。このカードが特殊召喚に成功したとき、デッキからインフェルニティと名のついたカードをサーチするよ。ボクは《インフェルニティ・インフェルノ》を手札に加え、そのままセット」

《インフェルニティ・デーモン》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1800 / 守1200

自分の手札が0枚の場合にこのカードをドローしたとき、このカードを相手に見せることで自分フィールド上に特殊召喚する。

また、このカードが特殊召喚に成功したとき、自分の手札が0枚の場合、自分のデッキから「インフェルニティ」と名のついたカード1枚を手札に加えることができる。

「うわあ、まこちん一気に展開してきたね兄ちゃん」

「そうだな。でも、《インフェルニティ・ネクロマンサー》がフィールドにいるからまだモンスターを蘇生できるぞ」

「そっか！ まだネクロマンサーは効果を使っていないもんね」

十代と真美も言うとおり、まだ真は蘇生させた《インフェルニティ・ネクロマンサー》の効果を使用していない。

それを使用するのか、真はチラリと《インフェルニティ・ネクロマンサー》に視線を一瞬だけ変える。

「さて、ここで《インフェルニティ・ネクロマンサー》の効果発動！ 墓地の《インフェルニティ・リベンジャー》を特殊召喚！」

「え？ 《インフェルニティ・リベンジャー》を？ ここは《インフェルニティ・ビートル》じゃない？」

「あはは……今日はトリシューラ家に忘れたんだ」

と、春香と真が会話している間に、《インフェルニティ・ネクロ

マンサー』の効果で蘇生されたモンスター、《インフェルニティ・リベンジャー》が両手に持っているリボルバー式の2挺拳銃を撃ちながら蘇生される。

《インフェルニティ・リベンジャー》

チューナー・効果モンスター

星1/闇属性/悪魔族/攻0/守0

このカードが墓地に存在し、自分の手札が0枚の場合、「インフェルニティ・リベンジャー」以外の自分フィールド上に存在するモンスターが相手モンスターとの戦闘によって破壊され墓地へ送られたとき、このカードを墓地から特殊召喚することができる。

この効果で特殊召喚したこのカードのレベルは、相手モンスターに破壊された自分のモンスターと同じレベルになる。

「続けてボクは、レベル3の《インフェルニティ・ネクロマンサー》とレベル4の《インフェルニティ・デーモン》にレベル1の《インフェルニティ・リベンジャー》をチューニング！ 死者と生者、ゼロにて交わりしとき、永劫の檻より魔の竜放たれる！ シンクロ召喚！ これが真の死神の恐怖。いでよ、《インフェルニティ・デス・ドラゴン》――！」

再びシンクロ召喚のエフェクトが室内を支配する。

《インフェルニティ・リベンジャー》から出現した緑色の輪から現れたのは、漆黒の体に鉤爪がついている巨大な2本の腕と細身の腕そしてドラゴンとしてはかっこ悪いような醜い頭部。これこそ、インフェルニティモンスターの中でも攻撃力が1番高く、《Dragon D-END》よりは使い勝手のいいバーン効果を持つ《インフェルニティ・デス・ドラゴン》だ。

もつとも、効果的には《インフェルニティ・デス・ドラゴン》よりも強力な効果を持っているインフェルニティモンスターがいるの

で最強とは言えないが。

「さらに召喚した《インフェルニティ・デス・ドラゴン》の効果発動！ 自分の手札が0枚のときに相手モンスター1体を破壊して、破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与えるよ！ ボクは《ジャンク・デストロイヤー》を破壊。インフェルニティ・デス・ブレス！！」

「《ジャンク・デストロイヤー》の攻撃力は2600だから……1300のダメージ！？ つきゃあああ！」

シンクロ召喚されたばかりの《インフェルニティ・デス・ドラゴン》の効果が発動。《ジャンク・デストロイヤー》を破壊して、春香のライフを1300ポイント削る。よって春香のライフは残り2100となった。

だが、《インフェルニティ・デス・ドラゴン》は効果を使用したため、このターン攻撃することができない。

「このターン、デス・ドラゴンは効果を使用したから攻撃できないターンエンド」

「ライフは2100……でも負けないよ！ 私のターン！」

春香のターンとなり、彼女はカードを1枚ドローする。

真のフィールドには攻撃力3000のシンクロモンスター、《インフェルニティ・デス・ドラゴン》が存在するのに対して、春香のフィールドは守備表示で存在する《レベル・ステイラー》のみ。

だが、春香の手札にはこの状況を打開する手段はあることに気がつく。

「リバーiscardオープン！ 魔法カード、《天よりの宝札》。お互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにドローするよ！」

「えっ！？　ここで《天よりの宝札》！？」

《天よりの宝札》（アニメ効果）

通常魔法

このカードはメインフェイズのはじめにしか発動できない。

お互いのプレイヤーは、手札が6枚になるようにデッキからカードをドローする。

春香はブラフとして伏せられていた《天よりの宝札》を発動して、真にもカードを6枚ドローさせる。

2人のデュエルを見ている真美は真にもカードをドローさせたことに驚いているが、十代とユベルの考えは異なっていた。

《天よりの宝札》は互いのプレイヤーの手札を増強する魔法。手札が0枚のときに効果を発揮するインフェルニティとそのサポートカードのほとんどのメタカードになる。春香は、インフェルニティカードの効果を潰すために使ったのだらう、そう十代とユベルは予測する。

「さらに私は手札からチューナーモンスター《デブリ・ドラゴン》を通常召喚！　《デブリ・ドラゴン》が召喚に成功したとき、墓地に存在する攻撃力500以下のモンスターを攻撃表示で特殊召喚することができる。私は《チューニング・サポーター》を特殊召喚するね」

「《デブリ・ドラゴン》から《チューニング・サポーター》……」
「そして、手札の《ドッペル・ウォリアー》の効果を発動！　墓地からモンスターが特殊召喚されたとき、このカードを手札から特殊召喚することができる。来て、《ドッペル・ウォリアー》！」

春香はとあるシンクロモンスターをデフォルメしたような容姿のドラゴン、《デブリ・ドラゴン》を召喚して墓地の《チューニング・

サポーター』を蘇生させる。

さらに、墓地から《チューニング・サポーター》が特殊召喚されることがトリガーになり、《ドッペル・ウォリアー》が特殊召喚される。これにより、春香のフィールドにモンスターが一気に3体も展開された。

《デブリ・ドラゴン》

チューナー・効果モンスター

星4 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻1000 / 守2000

このカードが召喚に成功したとき、自分の墓地に存在する攻撃力500以下のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚することができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

このカードをシンクロ素材とする場合、ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

また、他のシンクロ素材モンスターはレベル4以外のモンスターでなければならない。

《ドッペル・ウォリアー》

効果モンスター

星2 / 闇属性 / 戦士族 / 攻800 / 守800

自分の墓地に存在するモンスターが特殊召喚に成功したとき、このカードを手札から特殊召喚することができる。

このカードがシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、自分フィールド上に「ドッペル・トークン」(戦士族・闇・星1・攻/守400)2体を攻撃表示で特殊召喚することができる。

「私はレベル2の《ドッペル・ウォリアー》とレベル1の《レベル・ステイラー》、《チューニング・サポーター》にレベル4の《デブリ・ドラゴン》をチューニング！ 疾空を駆る眩き龍よ、大気を震わし、光り輝く星となれ！ シンクロ召喚！ 響け、《スターダ

スト・ドラゴン》！！」

「ここで《スターダスト・ドラゴン》！？ ……でも、ボクの《インフェルニティ・デス・ドラゴン》には及ばないよ！」

「（あれは遊星のモンスター……この世界では普通のカードとして存在するみたいだな）」

《スターダスト・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星8 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2500 / 守2000

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動したとき、このカードをリリースすることでその発動を無効にし破壊する。この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚することができる。」

「シンクロ素材になった《チューニング・サポーター》の効果で1ドロ。続けてシンクロ素材になった《ドッペル・ウォリアー》の効果を使うね。2体のドッペル・トークンを攻撃表示で特殊召喚するね。さらに墓地の《グローアップ・バルブ》の効果発動！ デッキトップのカードを墓地に送って蘇生！」

《グローアップ・バルブ》

チューナー・効果モンスター

星1 / 地属性 / 植物族 / 攻100 / 守100

自分のデッキの1番上のカードを墓地へ送り、墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚することができる。

「グローアップ・バルブ」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

春香がデッキの1番上にあるカードを墓地へ送って墓地から球根のようなモンスター、《グローアップ・バルブ》を特殊召喚する。

「ここで《グローアップ・バルブ》……？ それにレベル1のトークン……まさか！？」

「そのまさかだよ。私はレベル1のドッペル・トークンにレベル1の《グローアップ・バルブ》をチューニング！ 集いし願いが、新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ！ シンクロ召喚！ 希望の力、シンクロチューナー、《フォーミュラ・シンクロン》！！」

シンクロ召喚のエフェクトが出現する。

ドッペル・トークンが《グローアップ・バルブ》とともにシンクロ素材となり、そこからF1カーのような体を持つ汎用性の高いシンクロモンスターのチューナー、《フォーミュラ・シンクロン》が現れる。

《フォーミュラ・シンクロン》

シンクロ・チューナー・効果モンスター

星2 / 光属性 / 機械族 / 攻200 / 守1500

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体

このカードがシンクロ召喚に成功したとき、自分のデッキからカードを1枚ドロウすることができる。

また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚することができる。

「私は《フォーミュラ・シンクロン》の効果を使ってカードを1枚ドロウするね。そして、レベル8の《スターダスト・ドラゴン》にレベル2のシンクロチューナー、《フォーミュラ・シンクロン》をチューニング！ 優しき願いが集うとき、眩き光を纏いし龍が音速

の彼方で進化を遂げる。夜空に煌めく流星となれ！ アクセルシンクロ！ 輝いて、《シユーティング・スター・ドラゴン》！！」

春香がシンクロ召喚を行うのと同時に、普通のシンクロ召喚のエフェクトは異なる赤いエフェクトが火花を散らす。

《フォーミュラ・シンクロン》を先頭にして《スターダスト・ドラゴン》が光り輝く。そして、アクセルシンクロ専用のエフェクトが《スターダスト・ドラゴン》を包み込む。次の瞬間には《スターダスト・ドラゴン》が消えるが、すぐに姿を現す——アクセルシンクロにより進化した姿で。

その姿は、進化元である《スターダスト・ドラゴン》にあまり似てないが、どこか面影のある神々しい姿だ。

《シユーティング・スター・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星10/風属性/ドラゴン族/攻3300/守2500

シンクロモンスターのチューナー1体＋「スターダスト・ドラゴン」

以下の効果をそれぞれ1ターンに1度使用ずつできる。

- 自分のデッキの上からカードを5枚めくる。このターンこのカードはその中のチューナーの数だけ1度のバトルフェイズ中に攻撃することができる。その後めくったカードをデッキに戻してシャッフルする。

- フィールド上のカードを破壊する効果が発動したとき、その効果を無効にし破壊することができる。

- 相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター1体の攻撃を無効にすることができる。エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

「《シユーティング・スター・ドラゴン》の効果発動！ 自分のデッキからカードを上から5枚めくって、その中のチューナーの数だ

け連続攻撃ができる」

「俺の《E・HEROカオス・ネオス》と似たようなギャンブル効果か……」

「でもアニメみたいな展開にはならないよね」

「真美の言うとおりだよ。でも……チューナーが2体以上出た場合はボクの負けだね」

だが、チューナーが1体も出ない場合は《シューティング・スター・ドラゴン》は攻撃が不可能となる。

それでも春香はやるつもりだ――。

十代は彼女の目を見てそう思った。

そして、春香は自分のデッキの1番上のカードに指を掛けて、ドロ―する。

「1枚目……《奈落の落とし穴》。2枚目……《ダンディライオン》。3枚目……チューナーモンスター《アンノウン・シンクロン》。4枚目……《スターライト・ロード》。5枚目……」

ここで全員がつばを飲む。

今までめくられたチューナーモンスターは《アンノウン・シンクロン》1体のみ。ここでチューナーをめくらなければ真にチャンスが来る。

そして、5枚目がめくられる。

「……チューナーモンスター、《クイック・シンクロン》！」

「最後の最後でチューナーを引き当てやがった……」

『それでも十代の強運には及ばないわよ。あなたならチューナー5体を引き当てられそうだしね』

「（そうかもな）」

「これで《シューティング・スター・ドラゴン》は2回の攻撃が可

能。いくよ真！」

「……こい、春香！」

そして、攻撃宣言。春香は真のフィールドにいる《インフェルニティ・デス・ドラゴン》を指し示し、

「《シューティング・スター・ドラゴン》で《インフェルニティ・デス・ドラゴン》に1回目の攻撃。スターダスト・ミラージュ!!」
「くっ……! これでボクのライフは1100」

「続けて真に2回目の攻撃! スターダスト・ミラージュ!!」

2つの《シューティング・スター・ドラゴン》の残像が《インフェルニティ・デス・ドラゴン》を貫き、2度目の攻撃で真のライフポイントを全て奪う。よって真のライフは1100から0となり、春香の勝利が確定する。

真のライフポイントが0になると、ソリッド・ヴィジョンで映し出されていた《シューティング・スター・ドラゴン》が消える。

「いいデュエルだったね春香。……今度は負けないからな」

「うん! またやろうね真!」

「2人ともスゲエデュエルだったぜ! 思わず見入っちゃったよ」

「真美も真美も! はるるんにまこちん、凄いデュエルだったよ!」

一応、レッスン中だが4人はその後雑談しまくっていたが、そんなじゃ次は真美と春香でデュエルだな! という十代の発現により何とかレッスンを再開する。

その後レッスンは6時過ぎまで続いていたという。

「「ただいま帰りましたー」」

「たっだいまー！」

「うあー……初日だけどすんげえ疲れた……」

「お疲れさんです、十代プロデューサー、春香、真、真美」

765プロの事務所に戻ってきた十代たちを迎えたのは律子だった。

その律子は冷たいお茶が入ったペットボトルを十代に投げ渡す。
十代はそれを簡単にキャッチして、

「お、サンキューな律子」

「ただいま律子」

「で、どうだった？ 新しいプロデューサーのレッスンは？」

「失敗したところもあったけど結構上手だったよ。ね、春香」

「うん。デュエルタクティクスの指摘もわかりやすかったしね」

「真美もデッキの改造したほうがいい部分も教えてもらったしねー

」

案外十代のやりかたは好評のようだ。それを聞いて十代もペットボトルに入っているお茶を飲みながら一安心している。

そこで、十代は律子の持っている資料が気になりこう質問する。

「そっういや律子、その資料は何だ？」

「ああ、コレですか？ 今日送られてきたアイドル志望の子の資料です。明日面接する予定なので、よろしくお願いしますね十代プロデューサー」

「任せとけて。あ、そうだ、その資料見せてくれよ」

「良いですよ。はいどうぞ」

ペットボトルを自分の事務机に置いた十代は律子から手渡された資料をパラパラめくろうとする。

興味が出たのか、ソファで自分のデスク調整をしていた美希が十代の元にやって来る。

「プロデューサー、ミキにも見せて」

「おう。えーっと……………！？」

「？ どうしたのプロデューサー？」

資料を目にした十代が動きを止める。幸い資料はギリギリのところで落とさなかったが。美希が声を掛けたものの反応は無かった。十代はそれほど驚いていたのだから。

十代が見た資料、その中に映っていた写真には長く艶のある漆黒の髪をリボンでまとめて、可愛いというよりも凛々しい、と表現したほうがいい顔立ちの少女。瞳は十代がエースモンスターとしてデツキに投入しているとある悪魔族のカードと同じ、オレンジと水色のオッドアイが彼女に異様さを引き立たせる。

資料に書いてある名前には、篠ノ之箒と記されてあった。

——で、十代の隣にいた元ヤンデレ現ツンデレの悪魔族少女ユベルは資料を見て、妖しくも美しい笑みを浮かべながら、

『これから面白くなってきそうね♪』

と呟いたのは全くの余談である。……十代はそう思ったかったとさ。

TURN・4…初レスンSt@rt! 後編(後書き)

はい、ということとで春香のデッキは「クイックデブリダンディジャンクドッペル」でしたー！(↑デッキ名長いわ！)

ちなみにエクストラデッキは、

《シューティング・キューサー・ドラゴン》

《シューティング・スター・ドラゴン》

《スターダスト・ドラゴン》

《フォーミュラ・シンクロン》

《アームズ・エイド》

《TGハイパー・ライブリアン》

《ジャンク・ウォリアー》

《ジャンク・ガードナー》

《ジャンク・バーサーカー》

《ジャンク・デストロイヤー》

《ニトロ・ウォリアー》

《ターボ・ウォリアー》

《ドリル・ウォリアー》

《ライトニング・ウォリアー》

となっています。ちなみに作者が使っているデッキのエクストラと同じです。デッキレシピはまだ固まっていないのですが、TF6の遊星の高レベルデッキ、【集いし夢の結晶】を改良したものだと思います。ってください。

で、今回の《スターダスト・ドラゴン》の口上はラーの人で有名な禁書×遊戯王の動画で使われたのを使用しています。春香のイメージに合っていたので。

《シューティング・スター・ドラゴン》の口上は完全オリジナルです。某wikiから参考にしましたが。

今回使ったオリカ、《リバイヴドロ》の効果はどうでしたか？
評価お願いします。

それで次回ですが、なんと！ 皆さんお待ちかねのユベル箒化です！！！！ というわけで次回、「TURN・5」…新たなアイドル登場。その名は箒」でまた会いましょう！

……この小説、舞さんとか夢子出そうかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7100x/>

遊戯王アイドルマスターGX

2011年11月23日18時54分発行